



P A R A S O L

THE SURFSIDE VILLAGE
ICHINOMIYA



PARASOL

THE SURFSIDE VILLAGE
ICHINOMIYA

Fact Book

本資料の取り扱いについて

本資料は、日本国内・国外のメディア関係者に向けた報道等参考資料として制作されたものです。
つきましては、本資料内に掲載されている画像・図表・その他情報コンテンツの使用、
ならびに取材に関するご相談は下記までご連絡ください。

PARASOL - THE SURFSIDE VILLAGE ICHINOMIYA -
事務局（株式会社インヴェランス内）

TEL | 03-5302-7177

「風の谷のナウシカ」が教えてくれること。

【序文】

ロゴス（言葉 / 論理）と

ピュシス（自然 / 生命）の相克を超えて。

新しい世界を生き抜くための、

新しいバランスのあり方。

コロナ禍は
古くて、新しい問題だ。

2021 年、全世界の目はコロナウイルスの封じ込めに向いている。新型コロナウイルスは新しいが、この状況自体は人類が度々経験してきたものと大差はない。14 世紀、黒死病と呼ばれてユーラシア大陸で蔓延し、史上最大の帝国であったモンゴルを弱体化させた腺ペスト⁰¹。大航海時代のコンキスタドール（征服者）⁰² によって新大陸に持ち込まれた麻疹（はしか）や天然痘は、遺伝免疫や獲得免疫を持たない南北アメリカの先住民を否応なく襲い、のちの欧州諸国の覇権を結果的に後押しした。これら悪名高い病原体より遥かに致死率の低いコロナウイルスがこれほどまでに恐れられるのは、世界人口が80 億人に迫っていて低い致死率でもかなりの犠牲者が見込まれることや、このウイルスに対する免疫を持つ人がいないこと、移動手段の格段の進歩により感染拡大のスピードが圧倒的に早まっているからだ。

ロゴスとピュシスの相克。
その中で生きる人間という存在。

『生物と無生物のあいだ』や『動的平衡 生命はなぜそこに宿るのか』などの著作で知られ、「生命とは何か？」を哲学的観点からも追求し続ける生物学者・福岡伸一は、コロナパンデミックの世界情勢を捉えて、「コロナウイルスと人間との拮抗した状態は、『ロゴス (logos)』によって全てをコントロールできると考え、自らの『ピュシス (physis)』としての側面を忘れた人間に対する警告ではないか」と語る。「ピュシス」とはギリシャ語で「自然 / 生命」を、同じくロゴスは「論理 / 言葉」を意味する。本来、人間を含めた全ての生命は、一回きりでコントロール不可能なピュシスとして存在している。本来、生命は種の存続を至上命令とし、そこから逃れることはできない。人間だけが遺伝子（ひとも）の呪縛から自由になり、個々の尊厳を主張し始めたのは、偏に我々がロゴスを持ったからだ。ロゴスにより文明を築き、社会を発展させ、様々な制度を形づくってきた。「このロゴスのあり方が岐路に立たされている」と福岡は警鐘を鳴らす。福岡は言う。「人間はピュシスとロゴスの相克（対立・矛盾するもの同士が互いに相手に打ち勝とうとすること）の中でしか生きられない」と。

ナウシカはなぜ、
最後の希望を破壊したのか。

現代の状況を想起させる世界観で展開されるのが、宮崎駿による漫画版『風の谷のナウシカ』⁰³ だ。「火の7 日間」と呼ばれる最終戦争で近代文明が減ってから千年。蟲が支配し、猛毒の瘴気を発する腐海に飲み込まれないよう、人類は辺境で細々と生き永らえていた。マスクが欠かせない日常は、まるで現代を映しているようだ。戦争を終わらせるための戦争が繰り返されるなか、主人公・ナウシカは、千年前の滅亡を前に人類が残した「墓所」と呼ばれる場所にたどり着く。そこには文明の叡智を集めた「生命の浄化と再生のプログラム」が残されていた。これを使えば世界をやり直すことができる。これを前にナウシカはどうか。彼女は巨神兵という生物兵器を操ってその墓所を破壊し、物語は終結する。衝撃のラストだ。人類を救うことができる唯一の手段を、彼女はなぜ葬

り去ったのか。福岡は「計画された社会、制御された経済、あるいは完全にコントロールできるものとして成り立っている文明というものを、ナウシカは、本来のピュシスの在り方とは違うということで、『これはもう一度やり直すべきではない』と考え、（墓所を）破壊した」のだと分析する。墓所という存在は、AI（Artificial Intelligence：人工知能）⁰⁴ を使って論理、効率性、生産性を高め、アルゴリズムで最適解を求めるといふ、我々が目指そうとしている「進歩の方向性」とよく似ている。漫画の完結が1994 年であることを考えると、四半世紀以上前にこの警告を発した宮崎の慧眼に感服せざるを得ない。

テクノロジーは、
知恵であり、武器である。

しかしながら、科学技術に代表されるロゴスによって、人類がこの世界をより良いものにし続けてきた歴史を持つことを、私たちは知っている。ナウシカが墓所を破壊したのは、ロゴスとピュシスの間のバランス・均衡を保つ最適解を見つけることができなかったからとも考えられる。見つけれなかったから破壊するしかなかった。人類は危機に見舞われるたび、そこから学び、危機以前にも増して力強く立ち上がってきた。それも、一度や二度ではない。そして、過去の危機と大きく異なる点がある。それは「テクノロジー」の存在である。1918 年の、いわゆるスペイン風邪⁰⁵（インフルエンザ）の大流行により、アメリカは70 万人を失ったが、直後に「狂騒の20 年代」「ジャズエイジ」に突入し、働き方や社交様式にも大きな変化は見られなかった。「新常态」は生まれなかった。翻って、私たちはどうだろう。半強制的に新しい生活様式を取り入れざるを得ないなかで、気づいたことがある。それは、新常态を実現するためのテクノロジーを私たちがすでに手にしていたということ。ウイルスという忌まわしい見えざる脅威は、これまで目を瞑っていた社会課題や人間の暗部を顕在化させるだけでなく、私たちに与えられた武器と知恵にも光を同じように当てた。そして、その恩恵に気付いた私たちが以前の生活に戻ることは、おそらくないはずだ。

人間を、より人間らしくするため、
最適な均衡を見出そう。

人と接する機会が著しく減ったことで、その価値は一層高まった。万学の祖・アリストテレス（Aristoteles）⁰⁶ は著書『政治学』において「人間はボリス的動物（Zoon Politikon）である」と述べ、都市国家を意味するボリスに言及しながら、「人間は、自己の自然本性（生来備えている特徴・特性）の成就を目指して努力しながら、ボリス的共同体（より良く生きることを目指す人同士の共同体）をつくることで完成に至る」と説いた。都市とは、人が集まる場所を象徴するもので、人間は生まれながらにして、他者との交流を強く希求するものだという真理を、改めて思い起こさせる。産業革命以降、200 年以上も続いてきた仕事と生活の分断を緩やかに解消し、人間に深く根ざした「交流を求める回路」を改めて回してくれたのは、間違いなくテクノロジーだ。テクノロジーは人間から仕事を奪うものでも、人間を不幸にするものでもない。人間が、より人間らしく生きることを可能にする福音だ。時に、その使い方を誤ることがあったとしても、人間は失敗を繰り返しながら、程よい距離感を学んでいく。最適なバランスを見出すこと。これが私たちに与えられた時代の教訓だろう。

Fact Book

002 Introduction
【序文】「風の谷のナウシカ」が教えてくれること。

004 Contents
目次

005 Chapter 1
「変化の時代」に顕在化する新しい生き方の萌芽

新しい時代の、新しいキーワード。
歴史に学ぶ「変化の必要性」。

009 Chapter 2
仕事と趣味の現代的関係

仕事と趣味が共鳴する時代へ。
都心一極集中からの変化。
Case Study
01 | アートと一宮の幸せな関係。 = Kei Otsuka (二拠点生活者 / 波乗り絵描人)
02 | 移住 & 新規就農のモデルケース。 = 齋藤 絢子 (移住 & 新規就農者 / ミナモトファーム代表)
03 | サーフィンの町・一宮に新しい魅力を。 = 池田 雄大 (居住者 / OLI OLI 店長)

015 Chapter 3
PARASOL からはじめる未来

この場所から実現したいこと。 = 小暮 学 (株式会社インヴァランス 代表取締役) に訊く。
PARASOL の先に見るビジョン。

019 Chapter 4
PARASOL のすべて

PARASOL 施設概要 | 波の音が心地よい一宮のシンボルに。
PARASOL 施設詳細 | 多様なニーズに応える多彩な機能。
RESIDENCE | ライフスタイルに合わせたラインナップ。
【一宮の自然資源】多種多様なアクティビティ。

027 Chapter 5
PARASOL を創る人たち

PARASOL を創るチームビルディング。
PARASOL の魅力は「人」にあり。
01 | 鈴木 淳也 (株式会社インヴァランス)
02 | 岩切 剣一郎 (株式会社ケンロック)
03 | 佐々木 真 (株式会社波乗不動産)
04 | 池川 大樹 (PARASOL CLUBHOUSE マネージャー / コンシェルジュ)

033 Chapter 6
次世代の家 - スマートホームとは何か？

はじめてでもよく分かる「スマートホームの基礎知識」。
【インタビュー = 青木継孝】
スマートプラットフォーム「SpaceCore」の仕組み。

036 Company Profile
企業紹介

038 Annotation
注釈

039 Reference
参考文献

040 Colophon
奥付

ウィンストン・チャーチル (Winston Leonard Spencer Churchill)。「危機の指導者」として知られる政治家にして、民衆を鼓舞する名演説家。首相在任中にノーベル文学賞を受賞し、風景画の腕前はパブロ・ピカソ (Pablo Picasso) にも認められたほどの多才人。貴族の出であり、衣類や嗜好品は一流のみを好んだ。降りかかる危機に対する「勝利 (Victory)」を意味する「V サイン」 はチャーチルの代名詞ともなった。

Chapter 1

New Attitude for New Era

「変化の時代」に顕在化する
新しい生き方の萌芽



新しい時代の、新しいキーワード。

KEYWORD
1

集中 → 分散 / 極端から均衡への回帰

コロナ禍は、2011 年の東日本大震災以降、緩やかに進んできた社会の変化を加速させた。東京を中心とした大都市一極集中から、場所と時間にとらわれない生き方が一層の注目を集めている。極力モノを所有しない生き方が注目を集め、その最たる存在である「ミニマリスト」の増加も社会全体で見られた傾向だったが、そのライフスタイルを支えているものは常に同じプロダクトを生産し続ける供給能力と、それを安定的に流通させるロジスティクスであり、その前提が崩れた途端、非常に成立しにくいことも明確になった。その反動として、いつか訪れる未曾有の厄災に備えて過剰に物資を蓄積する「プレッパーズ（準備する人）」という生き方に脚光が当たることもある。つまり、どちらか一方への極端な集中ではなく、適度なバランスを保つことの重要性が改めて認識されたということだろう。日本には伝統的な世界観として「ハレ（晴れ）」と「ケ（喪）」⁰⁷ という考え方があるが、全世界的に広がっていた「祝祭的な毎日」は終わりを告げ、「日常を大切にしながら小さなハレの日を楽しむ生活」に戻る。そして、5G に代表される高速通信網と移動手段の発達、都市と地方をシームレスにする。これは「都市への集中」から「地方への分散」というよりは、「都市圏の拡大」につながるに違いない。「都市を構成する一部として地方」が一層注目されるだろう。



01 _ 最小限の所有物で生活するミニマリスト。日本では2009 年ごろから、ヨーガの行法に由来する「断捨離」のブームから、ミニマリストと呼ばれる人々が注目されるようになった。 02 _ いつ襲ってくるかわからない大災害（カタストロフィ）に備えて食料や生活備品、ひいては護身用の武器類までを備蓄する「プレッパーズ（Preppers）」、ミニマリズムと対局のマキシマリズムとも呼べる動きで、ゾンビ映画などで登場することで馴染みがある人もいるだろう。コロナ禍で顕在化した「フロー社会の脆弱性」に対するひとつの対応法だ。 03 _ 「グレーター・トーキョー（Greater Tokyo）」の構想は、その名からわかるとおり、元々は英・ロンドンに範を取っている。東京とその周辺圏による広域都市圏を指し、概念の提唱を通じてより強固な連携を図ろうとするもの。

04 _ 日本画の主題としても龍は欠かせない存在。龍は元来、皇帝の象徴であり、麒麟や鳳凰といった神獣の中でも特に格が高かった。守護神的性格を帯びたのは、インドから中国に仏教が伝来した際、水の神「ナーガ」も共に伝わり、龍と同一視されたことによる。絵は海北友松『雲龍図』（建仁寺所蔵）。 05 _ キリスト教の聖人・聖ゲオルギウス。ヤコブス・デ・ヴォラギネ（Jacobus de Voragine）の著した『黄金伝説』では、毒を持つドラゴンを征伐したのと引き換えに、その村でのキリスト教の布教に貢献したとして、聖人に列せられている。ドラゴンは村を悩ます自然災害のメタファーと考えられる。絵はピーター・パウル・ルーベンス（Peter paul Rubens）のもの。



" 自然に帰れ "

KEYWORD
2

18 世紀のフランス人哲学者であるジャン＝ジャック・ルソー（Jean-Jacques Rousseau）⁰⁸ の思想的根幹と考えられているのが「自然へ帰れ」という警句。「人間中心主義」と呼ばれる西洋の世界観は、人間の権利はすべての生物の権利に優先するというもので、自然環境を「制圧すべきもの」と見なし、利用することで文明社会を発展させてきた。その思想が限界を迎えつつあることは、改めていうまでもないだろう。一方で、東洋的自然観は「調和と共生」を重視してきた。多神教や、それを否定する形で生まれた一神教が広まる以前から、あらゆる自然物に靈魂が宿ると考えるアニミズムが浸透していた東洋世界。東洋の「龍」が、水を司る精霊であり守護神的性格を持ち合わせた崇拝や畏怖の対象であるのに対し、西洋の「ドラゴン」が秩序の破壊者として人間社会を脅かす悪魔的性格を帯びているのも、両者の自然観の違いに由来するものだ。国際共同意識調査の代表格である「世界価値観調査」でも、日本人は最も自然環境を重視することが明らかにになっている。21 世紀に入ってから「自然欠乏症候群」という概念も提唱されたが、密な環境を避けるという意味だけでなく、近年のアウトドア、キャンプ、登山といった自然と触れ合うアクティビティの一大ブームは、時代背景を受けた特徴的な動きに映る。

KEYWORD
3

アート＝右脳的思考 への期待

VUCA（Volatility：変動性・不安定さ / Uncertainty：不確実性・不確定さ / Complexity：複雑性 / Ambiguity：曖昧性・不明確さに由来するアクリニム）の時代と言われる。グローバル企業が世界的に評価の高いアートスクールに幹部候補生を送り込んだり、NY やロンドンの知的プロフェッショナルが美術館のギャラリートークに参加するのは、付け焼き刃の美術教養を身に付けるためではなく、極めて功利的な目的として「美意識」や「感性」を磨くためである。「industry4.0」とも呼ばれる現在進行形の「第4 次産業革命」では、あらゆるモノがインターネットにつながる「IoT（Internet of Things：モノのインターネット化）」の進展により、全ての分野で予測不能で不連続な変化が起こると考えられている。つまり、「分析」「論理」「理性」に軸足を置いた「サイエンス主導型意思決定」では、複雑で不安定な世の中に対応できないことを、よく理解しているのだ。現代社会は、「帰納（induction）」と「演繹（deduction）」を判断の基本に考え、前者はデータサイエンスと機械学習で、後者はAI によって自動化を図ろうとしている。しかしながら、人間が物事を理解する方法として欠かせないものがある。それが「仮説推論（abduction）」、すなわち「閃き」だ。この閃きこそが「人間を人間たらしめるもの」と言っても過言ではない。芸術作品や自然造形にそのヒントを求める潮流は、一過性の流行でも、過去への反省でもなく、より良く生きるための必然の解決策である。



09 _ 士郎正宗の『攻殻機動隊』には、脳内に投入したマイクロマシンを神経細胞と接続し、脳と外部装置を直接ネットワークする「電脳化」や、失われた四肢を人工物に置き換える「義体」が描かれる。課題はありながらも、テクノロジーに任せられる部分は任せ、人間は人間にしかできないことに特化できれば、人間を取り囲む「可能性の壁」を、また少し押し広げることができるだろう。



06 _ 2016 年のダボス会議を機に認知度が高まったVUCA。元々は東西冷戦終結後の先行き不透明な状況を指す軍事用語だった。ジョン・F・ケネディ（John Fitzgerald Kennedy）とニキータ・フルシチョフ（Nikita Sergeyevich Khrushchev）の時代に高まった数々の危機も、現代から見れば予測可能な範囲内に留まっていた。 07 _ MBA 取得者が激減する一方で、アートスクールや美術系大学院に幹部候補を送り込む企業が増えている。修士号・博士号を授与できる唯一の美術系大学院大学である英・ロイヤルカレッジオブアート（RCA）は、この分野のトップランナー。ジェームズ・ダイソン（James Dyson）らを輩出。 08 _ 「直感」は単なる思い付きではない。脳が過去にインプットしてきた経験・学習の膨大なデータベースから無意識的に解決策やアイデアを引き出す超高速の意思決定プロセスだ。アートの知識や考え方、すなわち「アート思考」は、このプロセスの訓練・強化に寄与する。

テクノロジーとの 共存

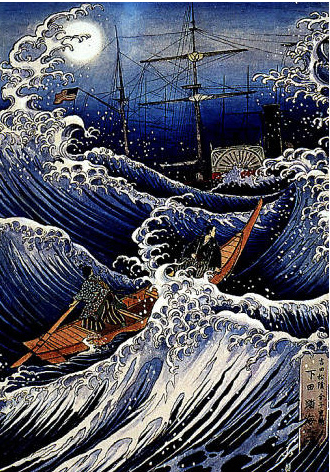
KEYWORD
4

アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ（Antoine Marie Jean-Baptiste Roger, comte de Saint-Exupéry）⁰⁹ は『人間の土地』の中で、「発明の完成はかくて、発明の忘却とその境を接するのだ。そして今日われらが用いる器具を見ても、目立つようなからくりはすべてすこしずつ消え失せてしまっ、海がみがきあげた小石と同じほど、自然な品物となっているに等しく、使われているうちに機械がすこしずつ自らを忘れさせてゆきつつあるのも、確かに賞賛すべきことだ」(堀口大學による訳)と述べた。テクノロジーはテクノロジーとして意識されることがなくなって初めて、真の普及と言える。ハイパサイクルに見られるとおり、新しいテクノロジーは例外なく過剰に期待され、ほんの少しだけ幻滅され、やがて社会に受容されて浸透・定着していく。現在では当たり前となっているVR（Virtual Reality：仮想現実）やAR（Augmented Reality：拡張現実）¹⁰ といった人間の経験を増幅させてくれるテクノロジーも例外ではなかった。新しい技術との理想的な関係性を探りながら取り入れていくことこそ、これからの世界を生き抜く態度として適切であるに違いない。

歴史に学ぶ「変化の必要性」。

良い危機は、変化の絶好機。 今こそ積極的な「選択的变化」を。

明治維新とは、第13代米国大統領 ミラード・フィルモア（Millard Fillmore）が派遣したマシュー・ペリー（Matthew Calbraith Perry）提督率いる4隻の軍艦が浦賀に来航したことに端を発する「突発的危機」に対して、四半世紀に渡って日本が行なった一連の選択的变化と言えるだろう。芸術、衣服、国内政策、経済、教育、天皇の役割、封建制、外交政策、行政、髪型、思想信念（イデオロギー）、法律、軍隊、社会生活、科学技術など、変革は日本人の生活の広範囲に及んだ。のちに松下村塾を開き、多くの弟子を育てた吉田松陰は、同郷の金子重之助とともに、下田沖に停泊していたペリーの旗艦 ポーハタンに秘密裡に乗船。当時、禁じられていた外国人との交流が遠因となって、二人は非業の死を遂げるが、ペリーは「自由にして大いなる好奇心の発露にすぎない」として、彼らの行動を諷えた。危機に際して変化を求めたこの行動は、のちに明治維新という形で結実する。



世界が直面している これまでにない大きな変化。

世界は大きな変化に直面している。未来は、直線的で見通しが利くものではなく、不確かで予測不可能なものとなっている。「気候変動」による地球環境への影響はますます大きくなり、深刻化する「天然資源の枯渇」に対し、米国はシェールガス革命によってエネルギー支配を強めようとしている。「格差」や「差別」といった社会問題は、国や地域の境界を飛び越えて、あっという間に全世界へと波及する。「Black Lives Matter」はその典型であり、この拡散を後押ししているのは、インターネットやSNSの爆発的普及にあることは明白だ。世界を覆う数々の問題は現在も加速度的に進行中であり、その解決策は見えていない。「この世界が危機に瀕している」という言説は、コロナ禍以前から存在し、SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）¹¹などは、その意識を共有するために可視化された最たる事例だろう。これらの問題は、ゆっくりと、だが確実に進行し、真綿で首を絞めるかのように、私たち人類をゆっくりと苦しめる。

「真に解決すべき問題」に 目を向けよう。

「人工知能」や「自動運転」といった、ひと昔前から見れば夢のようなテクノロジーが長足の進歩を遂げ、私たちが「時間」と「空間」の制約から解放される日はすぐそこまで来ているように見える。一方で、テクノロジーを絶対的基盤とした社会の発展を盲目的に信じることに、不安を覚える人も少なくない。フィリップ・K・ディック（Philip Kindred Dick）¹²、ロバート・A・ハインライン（Robert Anson Heinlein）¹³、アーサー・C・クラーク（Arthur Charles Clarke）¹⁴、ジョージ・オーウェル（George Orwell）¹⁵といったSF作家たちの名著が読み直されている

のも、ヴィジヨナリーが描いた未来にヒントを求める意識の表れだろう。私たちはテクノロジーの進化と折り合いをつけながら、「真に解決すべき課題」を、いかにして解決することができるだろうか。

協調と変化。 これからの時代に必要なこと。

コロナ禍からわかること。それは、大きな危機に対応するには、一個人、一国家の努力では限界があるという事実だ。それほどまでに世界はシームレスになっている。必要なのは、個々の利益に対するこだわりを捨て、見えざる脅威に対する現状認識を共有し、協調して解決策を探ること。それが実現できたとき、この体験と教訓を以って「真に解決すべき問題の解決」に臨むことができるだろう。そして、わたしたち個人は、「集中から分散」「自然への回帰」「右脳の思考」「テクノロジーとの共存」といった新しい時代のキーワードを意識しながら、一人ひとりが未来に向けて行動することが求められるだろう。これらのキーワードは、個人の生き方を良いものにするだけでなく、成長至上主義ではない、より自然な世界を実現する助けとなる。過去、危機に瀕した人類は、現状を偽りなく認識し、耐え忍び、変化を厭わない柔軟性によって新しい世界を切り拓いてきた。変化を自ら選び取る「選択的变化」こそが、「新常态」に適応する最善手となる。数々の危機的状況乗り越えてきた元英国首相 ウィンストン・チャーチル（Winston Leonard Spencer Churchill）¹⁶の「Never let a good crisis go to waste.（良い危機を無駄にするな）」という言葉は、この時代にこそ輝きを放つ。「現状認識の手法」と「解決の方向性の導き方」、そして「新しい時代に求められる立ち居振る舞い」を手ほどきするものであるならば、コロナウイルスがもたらした混乱と危機も、歴史的視点で見るときには、私たちに差す一筋の光明なのかもしれない。世界を巻き込んだ未曾有の危機を奇貨として、新しい時代に踏み出すヒントに変換できるか否かは、これからの私たちの行動如何にかかっている。危機は好機であり、個々人が変化するための、またとない機会に違いない。

ルネサンスを代表する芸術家で「ウオモ・ウニヴェルサーレ（Uomo Universale：万能人）」と称されたレオナルド・ダ・ヴィンチ（Leonardo da Vinci）は公証人の私生児として生を受けた。師・ヴェロッキオ（Andrea del Verrocchio）は、その才能に触れ、絵筆を握いたと伝えられる。現存する5,000ページを超える手稿には、解剖学・建築・天文学・機械工学・音楽・数学などありとあらゆる分野に及ぶ記述が残され、それらが全て絵画や彫刻のための知識として活かされていた。好奇心から湧いた趣味のように映る活動も、彼の仕事の血肉となっていたのである。写真はルーヴル美術館所蔵の『岩窟の聖母』。



Chapter 2

"New" Life & Work Balance

仕事と趣味の 現代的関係

仕事と趣味が共鳴する時代へ。

「仕事？ or 趣味？」は、もう古い。 シームレスこそがクリエイティビティの源泉。

創造的趣味が 感性を磨く。

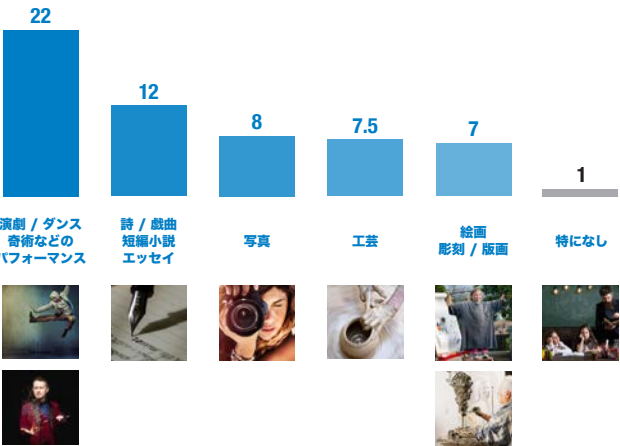
仕事と趣味の両立。長く使い古された言葉だが、これは相反する要素の両立ではなく、人生を豊かにする両輪だ。仕事の代名詞である論理的思考、すなわち「サイエンス」と、趣味の特徴である感性や直感の要素、つまり「アート」、その両輪があってこそ、初めて創造的活動が可能になる。それは、レオナルド・ダ・ヴィンチ（Leonardo da Vinci）¹⁷らが活躍したルネサンス期に限った話ではない。興味深い、ひとつの研究結果がある。現代最高の知性を表彰する科学・芸術分野の最高峰であるノーベル賞。そのノーベル賞受賞者との科学者のバックグラウンドを比較したところ、ノーベル賞受賞者には、他の科学者や一般の人と比較して、アート関連の趣味を持つ人が約3倍もいることがわかった。さらに、その種類を見ていくと、絵画や彫刻・版画では7倍、詩・戯曲や短編小説などでは12倍、演劇・ダンス、奇術などのパフォーマンスに至っては22倍と、驚くべき結果が出た。研究を主導したミシガン州立大学の生理学教授 ロバート・ルート＝バーンスタイン（Robert Root-Bernstein）らは「芸術的創造性が実験能力を高め、研究の成功率を高める。彼らは様々なパターンに慣れており、ツール操作にも長け、手と目を巧妙に協調させている」と結論づけた。感性を磨くことがパフォーマンス向上に直結していることを示す顕著な事実と言えるだろう。趣味を持つことは仕事にも明らかな影響を及ぼすのである。

A surfer wins Nobel Prize！ 波の上で受賞を知った鬼才。

仕事に良い影響を与える趣味は、何もアート関連に限った話ではない。キャリー・マリス（Kary Banks Mullis）¹⁸という名を知っているだろうか。その名を知らずとも、彼の功績は間違いなく知っているはずだ。マリスは生化学を専門とし、ヒトゲノム解析に欠くことができない、DNAの特定領域を増幅させる編集技術である「ポリメラーゼ連鎖反応法（Polymerase Chain Reaction）¹⁹」を開発した。そう、コロナウイルス感染判定に用いられる「PCR法」だ。マリスは愛車を駆ってドライブしている最中、天啓を受けたようにこのアイデアを閃き、路肩に停車して化学式を書き留めたという。1983年、実験成功。分子生物学を大きく前進させた彼の功績は10年後、ノーベル化学賞受賞という形で結実する。彼がその受賞の報を聞いたのは、研究室ではなくいつもの波の上。マリスはサーフィンをこよなく愛していた。研究室で悩むより、自然の中で自らを解放する時間を大切に。当初、彼の発想はあまりにも突飛なものだったため、有力な科学雑誌への論文掲載を断られている。世界有数の知性を持ってしても、その価値を見抜けないほどの独創性を発揮したマリス。そのクリエイティビティに趣味のサーフィンが与えていた影響は計り知れない。クリエイティブな趣味に没頭することで得られる瞑想的時間が、優れたアイデアやパフォーマンスを引き出すのである。

アートとノーベル賞受賞の可能性の関係

ロバート・ルート＝バーンスタインらの研究からニール・ヒンディが作成



研究対象となったノーベル賞受賞者のなかには、絵画、楽器演奏、写真、ダンス、ドローイングなど、様々なアートに熱心に取り組んでいると自ら述べる人も多かったという。この研究対象が1902年から2006年までの幅広い年代の受賞者を対象としていることから、普遍性のある結果と捉えて良いだろう。ノーベル賞受賞はIQ（知能指数）だけでは成し遂げられない。偉大なアーティストは「人間の脳で何が起きているか」を理解している。その感覚を取り込むことにより、曇りなき心の目で真理を見極めることが可能になる。「感性を磨く」ことが、科学の分野で抜きん出るための最良の方法のひとつなのだ。

サーフボードを抱えるマリス。マリスが発案したPCR法はDNAの特定領域を短時間で爆発的に増幅させる技術。これにより分子生物学の飛躍的發展に貢献したことが、ノーベル賞受賞理由となった。マリスはその功績はもちろん、あらゆる領域に対して、自分自身の考えを率直に述べることも知られていた。自然環境保護に躍起になる活動家に対し、「地球は一定の揺れ幅の中で環境が変化し続けてきたのだから、現時点の環境だけを維持することはナンセンス」とユーモアを込めて意見していたことも。サーフィンのみならず、興味の赴くままに天文学などにも没頭していたマリス。幅広く自由な興味・関心が、比類なき功績をもたらした創造性の源だったのだろう。



都心一極集中からの変化。

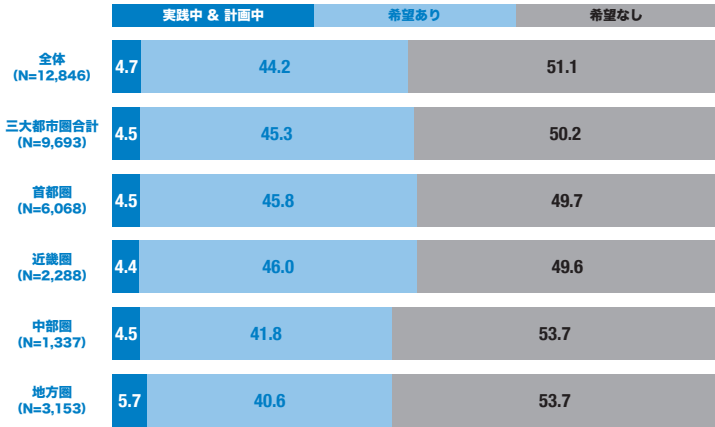
テクノロジーの進化が、距離的制約を限りなくゼロに。 二拠点生活 & 移住の大きな可能性。



五賢帝の一人・ハドリアヌス（Publius Aelius Trajanus Hadrianus）は、トラヤヌス（Marcus Ulpius Nerva Trajanus Augustus）の養子に際して養子に指名され、ローマ帝国第14代皇帝に即位。そのハドリアヌスは、先帝時代に最大版図に達した帝国領土の維持・安定に努め、領土内の視察も精力的に行った。各地で見た建築や風景に感銘を受けたハドリアヌスは118年、ローマ郊外のティヴォリに「ヴィラ・ハドリアヌス」という壮大な別荘地の造営を開始した。ハドリアヌスはこの地を頻繁に訪れ、政務の疲れを癒し、英気を養った。現代的に言えば、ローマとティヴォリの二拠点生活か。風光明媚で帝都からもほど近いティヴォリは、以降、別荘地として発展を遂げ、ローマの軍門に下ったバルミラの女王・ゼノビア（Zenobia）が、ここに住居を与えられたことでも知られている。

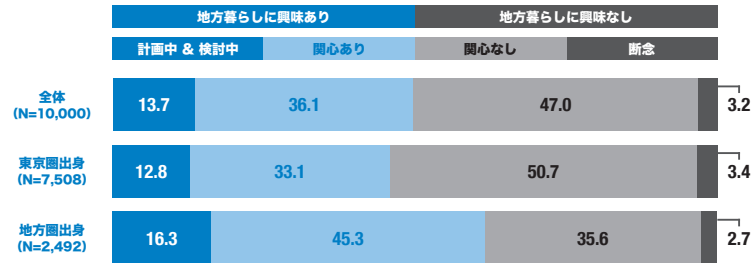
「自然豊かな地方と都市を行き来する生活」に対する意向

国土交通省「二地域居住推進施策のための基礎的調査」(平成21年)より



東京圏以外での暮らし（地方暮らし）に対する意向

内閣府官房「まち・ひと・しごと創生本部事務局調査」(令和2年)より



自然の中で仕事も趣味も楽しみたい。 デュアルライフは夢ではない。

リモートワークの急速な浸透もあり、「自宅でも勤務先でもない場所でも問題なく仕事はできる」ということは、いまや誰にとっても疑いがないだろう。テクノロジーの進化と普及により、都市圏と地方圏での業務環境の差はほとんどなくなったいま、より自分にとって心地よい環境で多くの時間を過ごしたいという要望も、ごく自然なものと言えるだろう。仕事と趣味の両立に価値を感じる人にとって、とりわけ魅力的なのが「二拠点生活（デュアルライフ）」だ。二拠点生活はその名の通り、自分にとっての拠点を二つ持つ暮らし方。移住とは異なり、現在の暮らしを維持しつつ、もう一つの拠点を持つため、現在のライフスタイルを大きく変更することなく、新しい楽しみを広げられるのが大きな魅力となっている。では、どのくらいの人々が二拠点生活を送りたいと考えているのだろうか。国土交通省が行った調査によると、三大都市圏（首都圏・近畿圏・中部圏）と地方圏を対象に行った調査によると、全体では44.2%が地方と都市を行き来する生活を希望していることがわかった。実践中 および 計画中を含めると約50%に達し、実に多くの人が二拠点生活を志向していることがわかる。地方圏在住者に比べて都市圏在住者の意向が高く、三大都市圏の比較では近畿圏がやや高くなっている。二拠点のみならず、移住も含めた広い意味での「地方暮らし」についても、ほぼ同様の結果が見られる。内閣府官房の調査からは、出身地ごとの差異を見て取ることができる。東京圏出身では「計画中および検討中」と「関心がある」を合計した「興味あり」という回答が45.9%であるのに対し、地方圏出身者では61.6%と大きな差が見られた。地方出身者は、元々、地方での暮らしに理解があり、引退後やこどもたちの独立後に出身地に帰ったり、好きな場所で過ごしたいという意向が強いと考えられる。一方で、「地方暮らし」に興味があったものの断念したという人たちも存在する。断念する理由はそれぞれにあるだろうが、経済面は大きな理由のひとつだろう。特に二拠点生活では、二ヶ所の住居コストを負担することになるため、簡単には実現できないことかもしれない。一方で、人口減少社会に突入している日本では、2023年には全国の空き家率が20%を上回るとも予想されており、場所や物件をうまく選ぶことで二拠点生活を後押しする材料になるかもしれない。「場所を変える」ことは、仕事にも、趣味にも、良い影響を与える。新しい土地で、これまでになかった自分の一面を発見することもあるだろう。人生100年と言われる時代、充実した毎日のために、1ヶ所に止まる以外の暮らし方を模索してもいいだろう。

Case Study 01 | アートと一宮の幸せな関係。

都市と地方。 両拠点を持つことで広がる、生活の可能性。

サーフィンの町・一宮。ヴェニスビーチ（米）²⁰やパイロンベイ（豪）²¹といった世界有数のサーフスポットと同様、ここにもサーフィンと親和性の高い「アート」に造詣が深い人々が自然と集ってくる。「波乗り絵描人」を自称するアーティスト Kei Otsuka 氏もその一人だ。二拠点生活を続けながらサーフィンとアートを軸に生きる彼の、一宮での幸せな生活とは。

3.11 で気づかされた「アートが秘める無限の力」。

絵を描き始めたきっかけは2011 年の東日本大震災。

「日本中が傷つき、多くの友達が悲しみ、僕自身も大きなダメージを受けた。そんなとき、漫画家の井上雄彦先生が毎日一枚の『笑顔の絵 (Smile)』をSNS に投稿されていたんです。それを見て、『僕にも伝えられることがあるんじゃないか』と思い、筆を握りました」

ここから、アーティストとしての歩みが始まった。絵を描き始めた頃は、誰からも見向きもされなかったという。その時に興味を示してくれたのが、サーフィンのために通っていた一宮のサーファー達だった。

「感度の高い人が多く、アートが根付きやすい一宮の町に、僕は生かされているとじます」

サーフィンで深まった一宮愛。 車中泊から次のステージへ。

アーティストとして評価され始めた頃、一宮がオリンピックのサーフィン会場に決定したのと合わせて、一宮町の「クリエイティブアンバサダー」に任命された。当時は、埼玉県草加市に居を構えながら、週末ごとに一宮を訪れ、車中泊でサーフィンを楽しみながら、地元との交流を続けていた。

「それまでも20 年近く、毎週末のように車で出かけてはサーフィンを楽しんでいました。日本全国、いろいろな場所に行きましたが、自分にとってのホームはやっぱり一宮でしたね。アーティストとして評価し

てもらい、名誉ある役職にも就かせていただいたのをきっかけに、一宮にも新しい拠点を借りようと決心しました。それから約4 年間、金曜日の午後自宅を出て、週末をこちらで過ごし、また日曜日の夜に戻るという暮らしを続けています。いわゆる二拠点生活です。他のクリエイティブアンバサダーの方でも、こうしたスタイルで創作活動をしているケースも珍しくありませんね」

二拠点生活を始めてから、地元の方との交流の機会も増えたという。「アートの力を通じて、町と海をつなぐ」という想いを持ちながら、サーフィンをしない人でも海に寄り添うことができるよう、二拠点生活で充実した創作活動に没頭していることがうかがえる。

家族で楽しむ二拠点生活。 その先には移住も視野に。

大学生の長男と長女、そして小学生の次女という三児の父でもある Kei 氏。「価値観を共有できている」という夫人も含めて、二拠点生活は家族にどのような影響を与えているのだろうか。

「家族全員で今の生活を楽しんでいると思います。長男や長女もサーフィンをやりますし、末っ子は一宮の友達も増えてきました。海で遊ぶうちに自然と仲良くなって。妻は僕の考えを理解してくれているので、特に困っていることもありません。大学生の子どもたちが社会に出るまでは、通学や通勤の利便性を考えて自宅は残すかもしれませんが、家族の成長に合わせて、一宮への移住も選択肢には入ってくると思います」

新しい働き方・新しい生き方が夢ではなくなってきた現代でも、多くの人が憧れる二拠点生活というライフスタイル。Kei 氏の日常をロールモデルとして、その可能性を探ってみてはいかがでしょうか。

二拠点生活者 / 波乗り絵描人

KEI OTSUKA

1977 年3 月3 日生まれ。北海道出身。高校卒業後に 22 歳まで南米アルゼンチンでサッカー選手として暮らす。日本でサーフィンに出会い、2013 年よりKei Otsuka Surf Art Canvas にて波乗り絵描人として生きる。オーストラリア最東端に位置するパイロンベイにて開催される「Byron Bay Surf Festival」に 2014 年、2017 年のゲストアーティストとしてアートショーに参加。2016 年、一宮町クリエイティブアンバサダーに就任。2017 年から、アートプロジェクトとして一宮より誕生した「enjoy_」project オーガナイザーを務める。



Case Study 02 | 移住 & 新規就農のモデルケース。

温暖な気候と、人の温かさ。 移住先としての一宮の魅力。



移住 & 新規就農者 / ミナモトファーム代表

齋藤 絢子 Ayako SAITOH

1981 年12 月9 日生まれ。東京都出身。小さいころから祖父の庭仕事を見て、田舎暮らしに淡い憧れを抱く。結婚を機に通勤圏内の一宮町へ移住。二人の子供に恵まれ、衣替えごとにワンサイズ大きくなる子供たちを間近に見て、食べるものの大切さに気付き、農業への道を真剣に考え始める。その後「人生一度きりだ!」と一大決心をし、12 年間お世話になった旅行会社を退職、一年間の農業研修を経て、2016 年、ミナモトファームを設立。

「都会を離れて地方でのんびりと暮らしたい」「自然の中でのびのびと子育てしたい」という願望を持つ人は多い。一方で、実現に踏み切るには多少の勇氣が必要だ。そうした、移住に憧れを持つ人にとって、ミナモトファームの齋藤絢子氏の経験は参考になるだろう。移住してから気付いたという一宮の魅力、これからの目標、そして、移住を考えている人へのメッセージに耳を傾けよう。

農業を始めてから改めて知った一宮の「人の温かさ」。

都内の旅行会社で働いていた頃から、田舎暮らしに興味があったという齋藤氏。義父が千葉県茂原市に住んでいたこともあり、近隣の一宮町への移住を決めた。物件選びにこだわりはなかったが、夫がサーフィンを趣味にしていたということも少なからず影響したという。

「私自身はどこでも良かったのですが、主人は一宮の物件ばかりを探していましたね（笑）。でも、今では一宮に決めて良かったと感じます。退職後に農業を始めてから、人の温かさには気付いたんです。夫や子どもたちと一緒にケラケラ笑いながら畑仕事をしているからなのか、近所の方たちが何かと気に掛けてくれるんですよ。本当にいい人が多いです、ここは」

現在の販売経路は、都内での出張販売や定期宅配便などが中心だが、直売所などを通じて地元の方との交流も多い。ミナモトファームの野菜を使う地元イタリアンレストランもあり、地域に根ざした農家となっている。

農業体験ツアーや加工品販売。 やりたいことは、まだまだある。

就農から5 年。10 反（約990 ㎡）の畑では、年間を通じて様々な野菜を育てている。黒潮がもたらす温暖な気候の賜物だ。

「農場の名前にもなっているとおり、私は『命の源』になる野菜を届けたいと思っています。農業・化学肥料不使用栽培でたくさんの野菜を

作っていますが、一宮の砂地と相性のいいタマネギなどが自慢です。これから特に推していきたいのが葉ニンニク。醤油に漬け込んで炒飯などに使っても美味しいので、ミナモトファームの目玉にしていきたいですね。一宮の町で一番好きな場所は、もちろん自分の畑です。私の畑は海から2 kmほど離れていますが、風も強く、塩害もあります。それでも、青い空と輝く太陽に恵まれているこの場所が大好きです」

今後は、添乗員としての経験も活かしながら、農業体験ツアーなども企画したいという。PARASOL とのコラボレーションも視野に入っている。

「都会で生活している人にとって、畑で過ごす時間はとても気持ちがいいものだと思います。援農に来てくれた人たちは、大根を引き抜くだけでも喜んでますよ。自分の身体を使って感じる機会を、ぜひたくさん作っていききたいですね。PARASOL でも、マルシェや加工品の販売なども協力して実現していきたいです。やりたいことは、たくさんありますね」

まずは「土地の魅力を知る」。 これが移住への第一歩。

「一宮は東京から1 時間程度ですが、自然に満ちた素晴らしい環境があります。いきなり移住ではなく、援農体験などを通じて一宮を知ってもらってからでもいいと思います。まずは、この町の魅力を感じてもらいたいです」

移住者の先輩として、これから移住を考えている人に向けたこのメッセージは、自身が一宮の人から感じるという「温かさ」に満ちたものだった。

Case Study 03 | サーフィンの町・一宮に新しい魅力を。

一宮は波だけじゃない。
大好きな町をクライミングでも盛り上げたい。

居住者 / OLI OLI 店長
池田 雄大 Yudai IKEDA

1998 年1 月1 日生まれ。東京都出身。小学5 年生時に一宮町に移住。千葉県立長生高校の部活動でクライミングをはじめ、順天堂大学に進学。高校卒業まではクライミングの中の種目「リード」「ボルダリング」を行っていたが、大学で出場する大会に「スピード」が含まれていたことが転機となり、「スピード」に専念することとなる。2019 年2 月、「第1 回スピードジャパンカップ」で初代王者に輝いた。その後、野口啓代、檜崎智亜らの指導にも携わる。2020 年3 月、一宮町にクライミングジム「OLI OLI（オリオリ）」をオープンし店長を務める。



オリンピックの正式種目にもなり、競技人口も増加しているスポーツクライミング。幼少期に一宮に移住し、今もこの町を拠点に世界を目指すのが、スピードクライミング²²を専門とする池田雄大氏だ。サーフィンだけでなく、クライミングでも一宮を日本有数の場所にするという夢を持つ池田氏。町やクライミングに託す想いに耳を傾けてみよう。

少年時代から培われた
地元・一宮への深い愛着。

日本を代表するクライマーの一人である池田氏。専門とするのはゴールまでの到達時間を競う「スピード」で、2019 年2 月に開催された「スピードジャパンカップ」で優勝し、初代王者に輝いた。現在22 歳の池田氏は、10 歳の時に一宮に移住し、以来、ほとんどの時間をこの町で過ごしてきた。

「一時期、この町を離れて暮らしていたこともありますが、コンクリートに囲まれて生活していると嫌になっちゃうんですよね。それに比べて一宮は自然が豊かで時間の流れも緩やか。ここにいると落ち着きますよね」

夜の海岸の鳥居から見る星。
砂浜で聴く波の音。

最近になってサーフィンを始めたという池田氏だが、お気に入りの場所も海に因んだものだという。それは都会では絶対に味わえない時間と場所だ。

「釣ヶ崎海岸の鳥居が好きで、よく足を運びます。夜になると町の灯りもほとんどなく、本当の暗闇になるので、星がよく見えるんです。夜空に星が光っているのを見ると、つい衝動的

に鳥居まで来てしまいますね。もちろん昼間の海も好きで、友達と砂浜に座って何時間も過ごすこともあります。ゆったりとした時間の中で波の音を聴いているだけでいいんです」

クライミングのために、
一宮に来る人も増やしたい。

池田氏がいま取り組むのは「クライミングを通じた一宮の魅力の発信」だ。2020 年3 月、クライミングジム「OLI OLI」をオープンし、自ら店長を務める。

「自宅の庭に小さな壁を作っただけだったのが、いつの間にか本格的なクライミングジムを作る流れになっていました。今では初心者向けから上級者向けまで多彩なコースが揃っていて、中には日本のトップクライマーである檜崎智亜選手や野口啓代選手が設定したコースもあるんです。サーフィンの町という印象が強い一宮ですが、日本トップレベルの選手が設定したコースを登れるというのは、大きなアピールポイントになると思うんです。『OLI OLI』のために一宮に来てくれる人が増えたら嬉しいですね」

クライミングを通じて、自身を育ててくれた町に貢献したいとも語る池田氏。この一宮は、そこまで思わせるだけの魅力に溢れているのだろう。

PARASOL のボードロッカーを飾るのは、自身も一宮町と埼玉県草加市で二拠点生活を送る Kei Otsuka 氏によるアート作品。『Welcome PARASOL』のタイポグラフィと、波と戯れる3 人のサーファーが踊るポップな作風は、『波の上にいる時が創作アイデアの源泉』と語る、Kei 氏のオープンな性格をよく表している。

Chapter
3

The Future We Dream of

PARASOL から
はじめる未来



この場所から実現したいこと。

【小暮 学（株式会社インヴァランス 代表取締役）に訊く】

PARASOLを起点に、 新しい価値を提案する。

都心を中心とした投資用マンションの開発を行ってきたインヴァランス。そのインヴァランスが千葉・一宮にサーファーズヴィレッジを作るというのは、少し意外に映るかもしれない。しかしながら、このプロジェクトを実行する背景には、「人が集まれる場所を作りたい」という確かな想いがある。自らもサーフィンを楽しむインヴァランス代表取締役である小暮学に話を聞いた。

サーフィンの町・一宮に生まれる 自然と親しむ人の拠点。

「一宮で新しいことを始めませんか？」と声を掛けていただいたのが2019年の秋頃だったでしょうか。私自身もサーフィンを楽しみますし、一宮に別荘も建てていたので、この場所に大きな可能性を感じていました。プロジェクトへの参加はすぐに決断しました。「サーファーズヴィレッジ」というコンセプトに行き着くまでに、それほど時間はかかりませんでしたね。一宮は町自体が「サーフィンと生きる町」を標榜していますし、毎年、国際的なサーフィンの大会である「WSL-QS6000」**23**も開催されています。そして何より、オリンピックの競技会場でもあるので、この場所でビジネスを手がけるのであれば、サーフィンをコンセプトから外すことは考えられませんでした。一宮周辺のサーファーが求めているものもわかっていたので、人が集まれる場所を作りたいという想いは元々持っていました。もちろん、千葉にはゴルフ場も多く、サーフィンだけでなく「自然と親しむアクティビティ」と親和性の高い方にも楽しんでもらえる場所になるでしょう。多くの人に喜んでもらえればと考え、僣越ながら私たちインヴァランスが旗振り役となって、このプロジェクトが動き始めることになりました。

魅力ある土地に寄り添い、 新しい価値を共につくる。

インヴァランスは、都心の投資用マンションを中心に物件開発を手がけてきましたが、地方にもまだまだ面白い場所はたくさんありますよね。コロナ禍の影響もあって、リモートワークやワーケーションといった概念が急速に広がりましたが、それ以前から、サーフィンを楽しみ

ながら仕事の質・効率を落とさない「エンジニアサーファー」と呼ばれるような人たちや、都心と地方の両方に拠点を持つ「二拠点生活」を楽しむ人たちの存在も知っていたので、PARASOLのような場所が求められているという機運は常々感じていました。都心からアクセスが良く、かつ、海や山といった自然に触れられる場所であれば、多くの人が喜ぶ場所ができそうですね。東京から1時間圏内でも、魅力的な場所はまだまだたくさんあります。地元の方にも寄り添いながら、これまでになかった新しい価値も提供できる。その意味で、PARASOLは「大人のための新しい遊び場」のプロトタイプでもあるのです。PARASOLという名称は、「海の近くにある『休める場所』」からの連想ですが、これが山に舞台を移した場合には「TARP（タープ）」なんてネーミングでもいいかもしれませんね。

スマートホームが、 不動産の価値を高める。

さらに別の視点で言えば、私が代表を務め、スマートライフ・プラットフォームを提供しているアクセルラボという会社があります。スマートホームは「IoT（Internet of Things）技術を活用して、家の中にある家電や防犯設備、各種端末などを常時ネットワークに接続した住宅」のことで、PARASOLでも導入しますが、このスマートホームの機能を活用すれば、従来は利便性が低かったり、住宅の管理が難しかったような土地でも、快適な生活を実現することができます。例えば、海沿いの住宅は塩害や湿度の問題があり、絶えず空調を効かせておく必要がありますが、常にその住宅にいれば、それも難しかった。結果的にその場所は不動産価値が上がらないこととなりますよね。スマートホームというテクノロジーを導入することで、こうした問題も解決されるのではないのでしょうか。

地域との共生は不可欠。 コミュニティの一員にならなければいけない。

もちろん、気をつけなければならないこともあります。東京の不動産会社が突然押しかけて行って、大規模な開発をしても、成功するはずがない。そこには、地域への配慮、地域との共生といった視点を欠くことはできないでしょう。都市部の人たちが訪れることで経済活動が活発になるのは、良いことには違いない。ただ、それだけではなく、その場所を訪れた人が土地の魅力を知り、その土地をもっと好きになってくれたら素晴らしいことですよね。今回、2020年のオリンピックは残念ながら延期になりましたが、CLUBHOUSEだけを先行して開業したのは、まさにこの視点が重要だと考えたからです。このCLUBHOUSEを起点に、地元の方たちとの関係性を築き、コミュニティの一員として認めてもらうには、それだけの時間をかける必要がありますから。このCLUBHOUSEでは、単に飲食の提供や物販で利益を上げるのではなく、訪れた人たちに対し、私たちのフィルターを通して一宮の情報を届けていきたいですね。

投資だけではない、 「生活を豊かにする方法」を提案したい。

私自身、都心で働きながら一宮の別荘でも時間を過ごしていると、日常から離れてリラックスできる時間を持てることは、仕事の面でも良い影響があると感じています。社会環境の変化やコロナ禍による「半強制的なオルタナティブの体験」を通じて、リモートワークを中心とした働き方の傾向はさらに強まっていくと思います。これまで存在した時間や距離、人間関係といった隔たりは、テクノロジーによってシームレスになっていく。当然、仕事と遊びを純然と区別することも難しくなります。高い賃料を支払って都会に住むことを自ら放棄するような人も増えていくでしょう。そうした人たちが、仕事をしながら生活の満足度も高められるような場所は今後より一層求められるはずで、PARASOLがその一つになれば嬉しいですね。もちろん、変わらず都心に住み続ける人もたくさんいるでしょうし、地方に拠点を移す動きが加速することとは全く矛盾しません。都心に住みたい人は都心に住めばいいし、地方に住みたい人は地方に住めばいい。テクノロジーの進歩が、住む場所による格差を埋めてくれるわけですから。この多様性（ダイバーシティ）があることが、豊かな社会の一つの象徴かもしれません。インヴァランスはこれまで投資用マンションを通じて、「生活を豊かにする方法」として投資の必要性を啓発・教育してきましたが、また新たな「生活を豊かにする方法」として、PARASOLのような提案をしていきたいですね。



株式会社インヴァランス 代表取締役
小暮 学 Manabu KOGURE

1976年生まれ。不動産会社、不動産施工会社にて、不動産建設や投資不動産物件の営業を経て、26歳で独立。2004年に株式会社インヴァランスを設立し、代表取締役に就任。住まいをテクノロジーによって進化させるために、スタートアップ企業への投資や、AI、IoTを活用したスマートホームに注力。インヴァランスで培ったスマートホーム事業を独立させ、2017年にアクセルラボを設立。不動産の管理業務機能やスマートホームを実現するIoT機能などを備えた、不動産テックプラットフォーム「SpaceCore（スペースコア）」を開発・提供している。

PARASOL の先に見るビジョン。

PARASOL の次に見据える、 新時代の価値提案のあり方。



暮らしをデザインする。 インヴァランスの新しい取り組み。

PARASOL は、都心を中心とした投資用マンションで数多くの実績を作ってきたインヴァランスが手がける新しい提案のひとつ。都市部から地方へと舞台を移し、新しい暮らしをデザインするプロトタイプが「PARASOL - THE SURFSIDE VILLAGE ICHINOMIYA-」という位置付けた。東京を中心に近隣3 県（神奈川県・埼玉県・千葉県）を含めた広域首都圏、いわゆる「グレーター・トーキョー（Greater Tokyo）」には、遊休地や管理に苦心している不動産が数多く存在する。そうした物件を含めて、都心部からのアクセスに優れた場所をターゲットとして、新しい価値を提供するプロジェクトを走らせる試金石ということになる。もちろん、「自然豊かな場所」という視点からいえば、海の近くだけではなく、山の近くでも同様のコンセプトで展開できる余地は十分にあるだろう。ビジネスとして成立するという判断がなされれば、「PARASOL」ならぬ「TARP（タープ）」が誕生する日も遠くないかもしれない。

人間本来の性質にしたがって、 自然の中に身を置くことが大切。

自然から離れて生きることの弊害が語られて久しい。解剖学者・脳科学者で、昆虫採集家としても知られる養老孟司も、都市生活者の現状を憂う。

「現代人のように自然を排除した都市だけで生活を続けているとバランスを失う。それは、『便利』『快適』という名の下に、人間の都合の良いように環境を作り変えているから。でも、人間は自然に揺さぶられることで、自分を変えてきた歴史がある。都市生活者も、時には自然の中に身を置き、自分の体にとっての快適な状態を知ることが必要なのではないか。僕が『森へ行け』という理由は、ここにある」

コンクリートに囲まれた都会で生活していると、誰もが自らの身体感覚が失われるような瞬間を味わったことがあるだろう。日常的なストレス状態も、自然と触れることが極端に少なくなることに起因する（いわゆる「自然欠乏症候群」）という研究結果も発表されている。PARASOL のような場所が増え、自然に触れたいと考える人が気軽に訪れ、仕事と趣味の線引きをすることなく、自分の時間を楽しむことができるようになれば、ストレスフルな毎日からの解放だけでなく、長年問題視されている生産性の低さも改善できるのではないだろうか。都市部には都市部のメリットとデメリットがあり、地方には地方のメリットとデメリットがある。重要なのは、一人ひとりにあったバランスを選ぶこと。テクノロジーの発展によって、一ヶ所に根を張らずとも、好きな場所で暮らすことができる時代が訪れたいま、PARASOL は新しい生き方・働き方を実現する拠点のひとつとなるだろう。

「PARASOL - THE SURFSIDE VILLAGE ICHINOMIYA -」は、その名が表す通り、海を愛する人が安らげる「海辺の集落」のような場所。決して気取ることなく、旅人を受け入れてくれる場所として、日本有数のサーフスポットである一宮町のシンボリック的存在になっていくことを目指している。サーファーだけでなく、海と自然を愛する人に寄り添う存在でありたいと願っている。写真は仏・ビアリッツ。ビスケー湾に面したサーフサイドの街並みが美しい。

Chapter 4

All about PARASOL

PARASOL の
すべて



PARASOL 施設概要 | 波の音が心地よい一宮のシンボルに。

ビーチと平行にどこまでも伸びるオーシャンフロントウォークとグラフィティアートが印象的なヴェニスビーチ（米）。大陸最東端に位置し、サーファーではない人たちも魅了する美しいビーチを誇るバイロンベイ（豪）。美食で知られるバスク地方のビスケー湾に面した風光明媚なサーフパラダイスとして知られるビアリッツ（仏）。世界に冠たるサーフスポットには、海と街並み、そして文化が渾然一体となった特有の雰囲気がある。PARASOL を起点として、日本有数のサーフィンの聖地に、新しい潮流が生まれるかもしれない。



「PARASOL - THE SURFSIDE VILLAGE ICHINOMIYA -」が位置するのは、日本有数のサーフトاونである千葉県一宮町の表玄関とも言える場所。一宮に着いたら、まずここへ行き、波の状況やレジャーに関する情報を集めて、一日の過ごし方に思いを巡らせるのも、ゆったりとした贅沢な時間の使い方になるだろう。

名称
PARASOL - THE SURFSIDE VILLAGE ICHINOMIYA -
パラソル ザ・サーフサイド・ヴィレッジ・イチノミヤ

住所
〒299-4301 千葉県長生郡一宮町一宮 10113-3

営業時間
▶ カフェ・ショップ・コワーキングスペース
7:00 - 18:00（季節による変動あり）

▶ サーフボードロッカー
24 時間利用可能

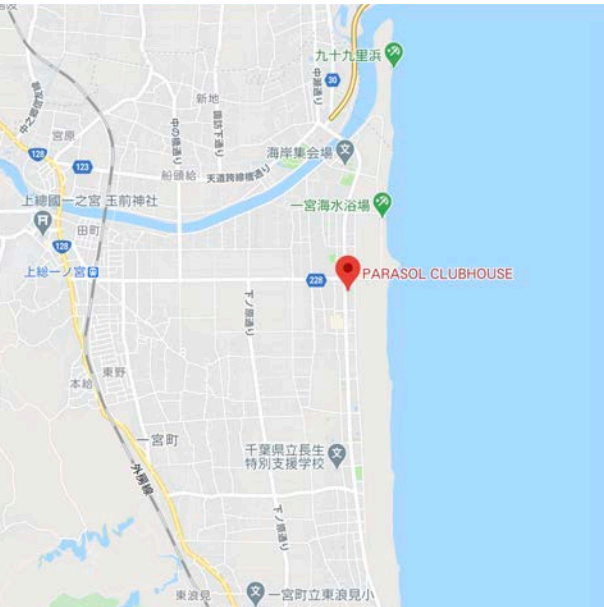
レジデンス住居数
16 戸（予定）

アパートメント住居数
24 戸（予定）

アクセス
▶ 車
▷ 東京方面から | 京葉道路・湾岸道路，千葉東 JCT，千葉東金道路，東金 IC，国道 126 号・東金九十九里有料道路，真亀 IC - 県道 30 号線

▷ 神奈川方面から | 東京湾アクアライン，木更津 JCT，首都圏中央連絡自動車道（圏央道），茂原長南 IC，国道 409・128 号・県道 228

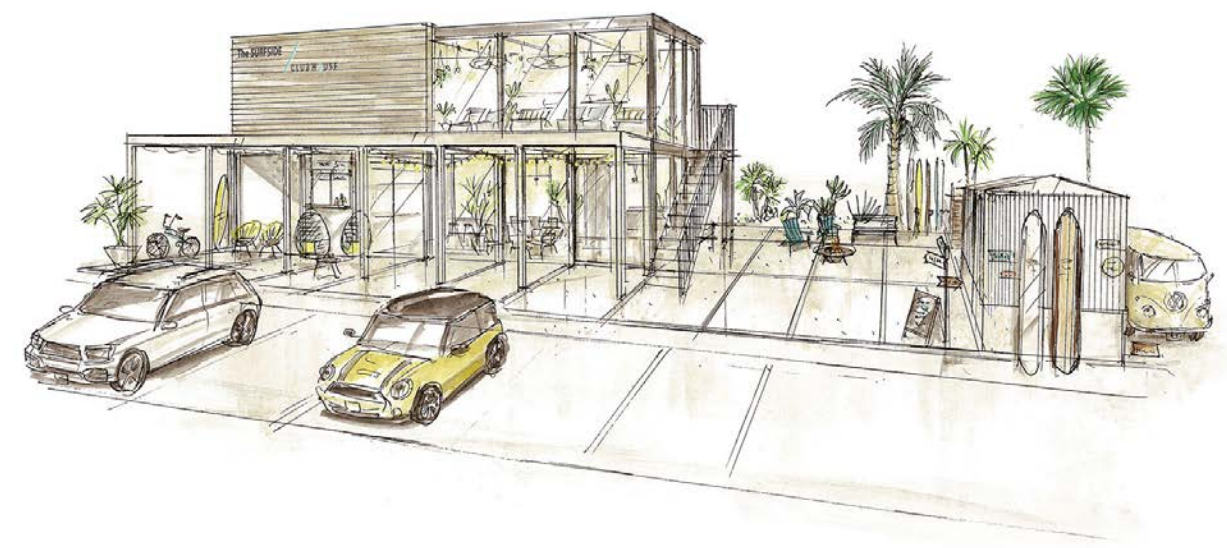
▶ 電車
JR 京葉線・特急わかしお もしくは JR 外房線で「上総一ノ宮(かずさいちのみや) 駅」にて降車後、タクシーで5分。



Google Maps

PARASOL 施設詳細 | 多様なニーズに応える多彩な機能。

PARASOL は、様々な機能を集約したPARASOL のシンボリック存在「CLUBHOUSE（クラブハウス）、オーナーの要望を汲んでフルオーダーメイドで仕上げられる分譲住宅「RESIDENCE（レジデンス）」、海を身近に感じられるコンパクトで使いやすい賃貸住宅「APARTMENT（アパートメント）」から構成される。全てがカリフォルニアテイストで統一され、調和の取れた心地よい空間となっている。



CLUBHOUSE
クラブハウス

遊ぶときも仕事をするときも自分らしく。「PARASOL CLUBHOUSE（パラソル・クラブハウス）」は、「人々が集い、出会い、笑う」という、まさにパラソルのような場所だ。このCLUBHOUSE（クラブハウス）は、多彩な機能を備えたPARASOL のベースキャンプのような場所だ。「カフェ」では、「Surf & Turf（波と芝、転じてシーフードとステーキの組み合わせた料理のこと）」と呼ばれる海と大地の恵みを一緒に楽しめるメニューを提供。ランチでは、サーファーも満足できるハンバーガーをメインとしたボリュームあふれるメニュー、ディナーでは旬の食材を取り入れたグリル料理、他にもスペシャルなデザートや気軽なカフェメニューも展開する。「ショップ」では、こだわりの視点で選び抜いた逸品やオリジナルグッズを取り扱う。「コワーキングスペース」は、Wifi 環境など、リモートワークに必要な機能が充実し、波の音を聴きながらゆったりと仕事や趣味を楽しめる。また、サーフィンの聖地ならではの「サーフボードラック貸出サービス」や、豊かな自然の中で家族や友人と楽しい時間を過ごせる「手ぶらバーベキュー」なども、このCLUBHOUSE（クラブハウス）を特徴付ける。CLUBHOUSE（クラブハウス）は、単なる商業施設ではなく、一宮町を知り尽くし、この町の持つ様々な顔や、魅力あふれる人や場所を広く伝えていく「コンシェルジュ」となることを目指している。また、地域の農家の方が育てた野菜や果物、確かな手仕事で作られたクラフトなどを集めた「マルシェ」の展開なども予定。サーフィンをする人も、そうでない人も、思い思いの時間を過ごすことができるのが、このCLUB HOUSE（クラブハウス）だ。

RESIDENCE
レジデンス

一人の休日を楽しんでもいいし、家族や仲間と暮らしてもいい。PARASOL の分譲住宅は、それぞれ特色の異なる4つの区画（CUSTOM / FLAT + / PLAY / LIVIN'）を用意。理想のライフスタイルや利用シーンに合わせて自分にぴったりの住まいを見つけることができる。「CUSTOM」は、敷地内での自由設計でオーダーメイドで理想の暮らしを叶える。「FLAT +」は、ご夫婦や単身向け、「PLAY」はガレージを併設して自由な発想・使い方次第で家の楽しみ方が広がる。「LIVIN'」はファミリー向けと、様々なライフスタイルや用途に最適化したプランを提案する。

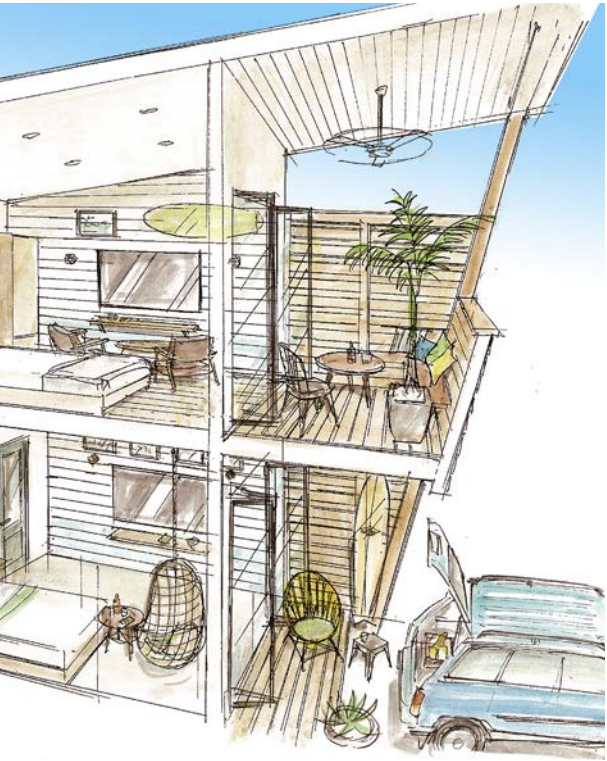
住居数	16 戸（予定）
間取り	1LDK ～ 3LDK



APARTMENT
アパートメント

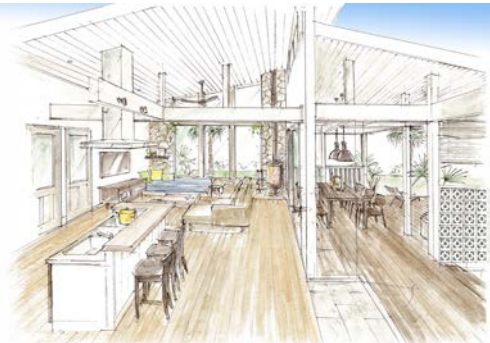
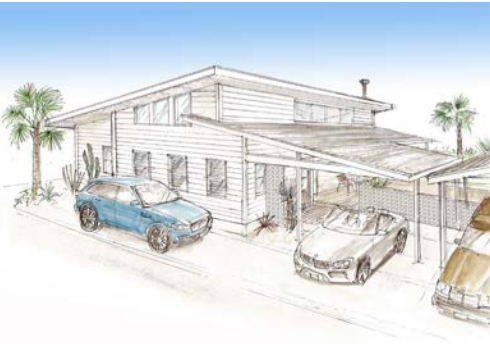
大好きな海のそばに、新しい生活の拠点を手に入れたい。そんな想いに応えるのがPARASOL の賃貸アパートメント。コンパクトな間取りながらも、そのつくりはこだわりに溢れ、施設内に併設するカフェやワークスペースなども贅沢な時間を演出してくれる。都心の拠点を維持しながら、週末や休暇を活用して趣味を謳歌する第二の拠点としてもよし。仕事の仕方が大きく変わる昨今、主たる拠点をここ一宮に移してもよし。オーシャンサイドの暮らしを満喫できるアパートタイプの賃貸物件だ。

住居数	24 戸（予定）
間取り	1 ルーム + テラススペース



RESIDENCE | ライフスタイルに合わせたラインナップ。

PARASOL の分譲住宅「RESIDENCE (レジデンス)」では、「CUSTOM (カスタム)」「FLAT + (フラットプラス)」「PLAY (プレイ)」「LIVIN' (リヴィン)」というテーマの異なる全4 タイプを揃える。ライフスタイルやライフステージに合わせて建築デザイナー・岩切剣一郎氏がフルオーダーメイドで手がけるもので、居住者それぞれの嗜好性やこだわりを映し出す魅力的な場所になることは間違いない。



01 CUSTOM

カスタム

概要

贅をつくした間取りはもちろん、広々とした庭に、使い道自由のデッキスペース。フルオーダーメイド設計でサーファーの理想を叶える、PARASOL 最高級クラスのレジデンス。

特徴

- ▶ フルオーダーで区画内を自由にカスタマイズ
- ▶ 様々な趣味と暮らすための理想を追求
- ▶ 家族構成やライフスタイルに合わせた最適な住まいを実現

住居数 2 戸 (予定)
間取り オーダーメイド対応

02 FLAT +

フラットプラス

概要

開放感あふれる、今人気の平家タイプ。空間がシームレスにつながる間取りが、日々の暮らしをシンプルに送りたい人のライフスタイルにマッチし、ゆったりとした時間に包まれる

特徴

- ▶ ロフトスペースのある平屋で広がりのある空間を実現
- ▶ 屋外からのアプローチも快適に
- ▶ 十分な天井高で開放感を演出

住居数 5 戸 (予定)
間取り 1LDK + ロフトスペース

03 PLAY

プレイ

概要

建物の中にガレージを組み込むことで、家の前にあそび心を刺激する広々としたスペースを確保。まるで自分だけの隠れ家のような空間づくりが、サーファーたちの好奇心をくすぐる。

特徴

- ▶ 趣味道具の収納にも抜群の機能性を誇るガレージ
- ▶ 想像力次第でストレージ以外の用途も無限大
- ▶ 知的好奇心溢れる大人のための秘密基地に

住居数 4 戸 (予定)
間取り 1LDK + ガレージスペース

04 LIVIN'

リヴィン

概要

海のある街で大切な人と一緒に時を刻んでいきたい。家族や仲間と住んでも十分なほどの生活スペースを確保した住まいが、その思いを実現してくれる。

特徴

- ▶ 4 タイプの中で最大有効スペースを誇る
- ▶ 夫婦でも家族でも幅広い家族構成
- ▶ 十分な生活スペースでプライバシーへの配慮も可能

住居数 5 戸 (予定)
間取り 3LDK



【一宮の自然資源】 多種多様なアクティビティ。

太平洋を走る黒潮の恩恵によって、一年を通じて、温暖で過ごしやすい気候の一宮町。その代表的な自然資源は、サーフィンのプロフェッショナル大会会場にも選ばれている美しい海に違いない。そして、他にもゴルフや多様なビーチアクティビティ、農業体験といった魅力的なコンテンツに溢れている。それぞれのライフスタイルに合わせて、一宮町は多種多様な顔を見せてくれるだろう。



SURFING

サーフィン

年間を通じて良質な波が絶えない一宮町は、1970年代頃からサーフィンが盛ん。現在でも、人口1万2000人の一宮町を訪れるサーファーは、年間で約60万人にも達する。県道30号線（通称「波乗り道路」）沿いには、ビギナーからプロまであらゆるレベルやスタイルに合わせて楽しめるサーフポイントが存在。オリンピック会場にも選ばれ、自然保護と経済効果を両立する視点で世界中で成果を挙げている「サーフォノミクス（Surfonomics）」を基本戦略に据え、「サーフィンと生きる町。」をスローガンに掲げている。



GOLF

ゴルフ

かつては「西の大磯、東の上総一ノ宮」と呼ばれ、明治期の元勲や文人が多く別荘を構えていた一宮町。気候が温暖で風光明媚な土地柄は、ゴルフを楽しむ環境としても申し分ない。現在も、人気のゴルフ場が数多く存在する。ゴルフ発祥の地・スコットランドでは、海沿いの平坦地を活かしたゴルフコースを「リンクス」と呼ぶが、海岸線特有の植物が生い茂り、砂浜にこびりついた芝などは、リンクスを構成する特徴のひとつ。英国人がこの場所を訪れていたなら、海岸線沿いに母国並みのゴルフコースを作っていたかもしれない。



BEACH ACTIVITIES

ビーチアクティビティ

一宮の海では、浜辺近くにまでスナメリ（ネズミイルカ科の小型のイルカ）が姿を表し、沖に出れば黒潮に乗って太平洋を渡るクジラを見ることがもできる。サーフィンをやらない人でも、豊かな海の自然を存分に楽しめる。夏の海水浴はもちろん、様々なビーチスポーツやビーチコーミングなど、ビーチで満喫する方法は枚挙に遑がない。また、沖合いは黒潮と親潮が衝突する豊かな漁場となっており、特にマサバやゴマサバ、根魚（岩礁や海藻類の間に生息し移動しない魚）のスズキなど、新鮮な海産物も一宮の魅力のひとつだ。



AGRI-TOURISM

アグリツーリズム

九十九里浜の南端に位置する一宮町は、総面積 22.97km²のうち、大半を肥沃な田畑や山林が占める。東京から1時間程度でアクセスできる場所に、四季ごとの自然あふれる環境が存在しているのだ。一宮では、長生トマト、長生メロン、長生梨といったブランド農産物が特によく知られ、観光資源としてのイチゴ栽培なども盛ん（1月から5月頃）。自然を体感しながら、豊かな自然環境に触れることは、都会での生活で味わえない貴重な時間になるだろう。

プロジェクトマネジメント、建築デザイン、ローカルプロパティマネジメント。それぞれのプロフェッショナルが集まったことがPARASOL 実現の大きな鍵となった。海外のサーフタウンに比肩する街並みをつくるというヴィジョンは、温かみある設計図面から始まる。

Chapter 5

Creators of PARASOL

PARASOL を
創る人たち

PARASOL を創るチームビルディング。



自然を愛するすべての人が、
集まれる場所になってほしい。



「一宮の豊かな自然と触れ合う拠点に」

PARASOL が建つのは一宮の中心とも言える場所で、海はもちろん、山や畑といった一宮を持つ豊かな自然にアクセスするのに最適なロケーションです。居を構えるにしても、ゲストとして訪れるにしても、PARASOL に来ていただければ、「一宮のいま」を知ることができます。ぜひ、一宮を楽しむ拠点として、PARASOL を楽しんで頂ければと思います。

Manabu Kogure

PARASOL の魅力は「人」にあり。 _ 01 鈴木 淳也

人の「想い」を「形」にすること。

成功事例を作って、次の展開につなげる。 _ 鈴木 淳也（プロジェクトマネジメント）

総敷地面積1,500 坪の大規模プロジェクトともなれば、そこに関わる人たちすべてがそれぞれの夢や想い、こだわりを託したくなるもの。ともすれば、「船頭多くして...」という展開に陥りそうなものだが、そこには現実との折り合いをつけるプロフェッショナルの存在があった。PARASOL のプロジェクトマネージャーである鈴木淳也氏が語るPARASOL 実現のポイントとは。

「夢」と「現実」のバランスを取る。

このPARASOL のプロジェクト自体が立ち上がったのが2020 年。元々のスタートは、弊社社長のサーフィン仲間たちのネットワークから、話が始まりました。「サーフィンを楽しむ人たちが欲しがるところを作りたい」という想いが最初にあったプロジェクトで、これまでに弊社が手がけてきた都心部の投資用マンションとは少し毛色が異なるプロジェクトと言っていていいでしょう。通常のプロジェクトでは、スタート時点で明確な予算があり、その中で実現できることを最大化していくという思考プロセスになりますが、このプロジェクトの場合、明確な予算枠を設けずに動き始めました。もちろんこれは、予算が青天井という意味ではありません。建築計画、仕様、将来的な入居や集客の試算など、関係する様々な情報を加味した上で、多くの人の想いや夢を形にしていくという手順を踏みました。例えば、天井まで全て板張りにすれば、見た目は非常に良いものとなります。しかしながら、海に近い立地環境を考えると塩害に強い材質が必要ですし、できる限りコストも抑えたい。「カッコいいものを作りたい」「細部にまでこだわりたい」という想いは持っているもの。一方で、コストや機能といった面から、言うべきことは言わなくてはけませんよね。一事が万事、こうした調整を経て現実に着地させていくという役割を担っていましたね。

サーファーたちのネットワークの力を感じた。

私たちは東京の会社なので、何のリレーションもなく、いきなり一宮の町にこれだけの規模のプロジェクトを立ち上げることにしたら、地元のルールもわからないなかで様々な軋轢を生んでいた可能性はあるでしょう。その点において、PARASOL のプロジェクトで大きかったのが、一緒に動いてくれたパートナーに恵まれたことですね。「波乗不動産」の佐々木さんは、地場の不動産業者として数多くの物件を手がけてきた実績もあり、行政との調整をはじめとして多くの調整ごとを円滑に進めていただきました。施工管理から入居者管理まで、幅広い業務範囲を担われている点も、非常に心強かったですね。「ケンロック」の岩切さんも、カリフォルニアの文化を反映した住宅を数多く手がけられていて、これも私たちにはない知見ですね。「人が人を呼ぶ」ようなサーファー独自のネットワークの力を感じました。こうしたパートナーシップが組めたのは非常に幸運だったと言えますね。

日本全国に、このスキームを広げたい。

関わる人のほとんどすべてがサーファーということから、サーファーならではの視点も豊富に盛り込まれたサーファーズヴィレッジが誕生したと自負しています。このPARASOL が成功すれば、それは大きな手応えにつながると思います。この場所と同じような立地条件や集客環境、チームを形成するプレイヤーを揃えることができれば、それこそ日本全国どこでも同じようなスキームで展開することができるでしょう。もちろん、海だけではなく山も視野には入りますよね。そのために、このPARASOL のプロジェクトを「スムーズに」成功させたいという想いを強くしています。



株式会社インヴァランス
取締役 / デベロップメント事業本部長

鈴木 淳也
Junya SUZUKI

1975 年生まれ。マンションの管理受託実績で業界トップクラスを誇る不動産管理会社にて、マンションの用地・仕入れ事業を経験。既成概念に捉われない社風に惹かれ、30 歳の時にインヴァランスに転職。立ち上げメンバーとして、用地・開発部署をゼロから築き上げる。土地の特性や環境を徹底的に調べ上げ、その環境に適した建物を立てる綿密な企画・設計を行いながら、マンション開発の可能性を追求。インヴァランスのマンションブランド「CREVISTA（クレヴィスタ）」「LUXUDEAR（ラグディア）」において、業界トップクラスの供給戸数を誇る。

PARASOL の魅力は「人」にあり。 _ 02 岩切 剣一郎

家づくりから街並みづくりへ。

自然と町が一体化したモデルケースに。 _ 岩切 剣一郎 (建築デザイン)

PARASOL の建築デザインを手がけたのは、ケンロックの岩切剣一郎氏だ。独学で建築を学び、サーフカルチャーとも親和性の高いカリフォルニア特有の建築様式を得意とするその作風で、サーファーのみならず多くのファンを抱えることでも知られている。PARASOL の背景にある「自然と一体となった街並みづくり」への想いを語っていただいた。

日本の住宅を「カッコいいもの」にしたい。

私は幼い頃からものをつくることに興味を持っていました。CAD（コンピュータ支援設計）の専門学校を出て施工の現場に入り、その後、独学で一級建築士資格を取得しました。いわゆる叩き上げですね。建築の現場で疑問に感じたのが「どうしてこんなことになってしまうのか?」「どうしてこんなに自由がないんだろう?」という思いでした。単純にかっこよくないんですね。ある時、出版社で新規事業を立ち上げる機会に恵まれ、そこで自分が好きだったバイクやサーフィンといった趣味とも相まって、「カリフォルニア」をコンセプトとして家づくりをしようと考えたのです。「サーファーズハウス」という企画住宅も、ライフスタイルを起点に生まれてきました。以来、ライフスタイルにこだわりを持つ人、憧れを持つ人のために、私自身が「カッコいい」と感じる住宅を作り続けています。

地域に根ざし、多様な人が集まる場所を。

PARASOL が実現できたのは、正に人の縁です。「波乗不動産」の佐々木さんと一緒に、この場所でサーフヴィレッジを作りたいと考えていたところに、「インヴァランス」の小暮さんが賛同してくれたという経緯があります。小暮さんの別荘が私が手がけていなければ、PARASOL は全く違った形になっていたかもしれません。PARASOL での私の役割は、全体の企画とデザインです。これまで私が作ってきた家づくりの延長線上にありながら、従来のプロジェクトと最も異なる点は、「点」ではなく「面」でのデザインであること。特に、この中央に位置する「CLUBHOUSE」の存在が、全体の価値を高めていると考えています。サーファーのために必要な機能を整備するだけでなく、多様な人が集まる場所を作ることで、そこから新しいビジネスも生まれていくでしょう。そうした場所は、今までにはなかなかありませんでしたから。そして、一宮町で事業を行うには、やはり地域に根ざすことは不可欠です。ビジターの役に立つ情報を提供するだけでなく、地域の店や施設への送客機能を持たせていくというビジョンを持っています。PARASOL が地域発展の拠点、地域社会のシンボルになり、みんながハッピーになるといいですね。

「家づくり」で培った経験と知識を「街並みづくり」につなげる。

頻繁に現地を訪問していますが、私自身が一貫してベンチマークとしているのが「カリフォルニア」です。ここでの街並みやライフスタイルを見ると、やはり「家づくり」だけでは十分ではなく、「街並みづくり」が必要だと強く感じます。カリフォルニアのヴェニスビーチのように、ビーチフロントに整然と家が立ち並ぶのは難しいかもしれませんが、自然との一体感を持った街並みが求められているというのは、世の中から感じ取ることができます。それが人間に本質的に備わった特徴なのでしょう。これまで私は「家」を作ってきましたが、これからは「街並み」を作らなければいけないと思っています。このPARASOL が形になれば、具体的なビジュアルイメージを持つことができるでしょう。行政、地権者の方、投資家の方など、多くのステークホルダーがこのPARASOL を見て、体感することで、豊かなライフスタイルを実現できる場所が増えていくと考えています。



株式会社ケンロック CEO / 代表取締役
一級建築士

岩切 剣一郎
Kenichiro IWAKIRI

建築デザイン事務所「カリフォルニア工務店」を立ち上げ、アメリカ西海岸の文化を現代的に解釈した『カリフォルニアスタイル』を提案。建築、インテリア、ライフスタイル業界に新しい風を吹き込むパイオニアとなる。施工現場から設計の世界に足を踏み入れ、その後、独学で一級建築士資格を取得。デスクの上だけではなく、現場経験やサーフィン・バイク・ゴルフ・音楽など幅広い趣味から得た知識を設計に活かし、施主の要望をさらに膨らませた空間づくりの提案を得意とする。

PARASOL の魅力は「人」にあり。 _ 03 佐々木 真

人と情報が集まる拠点。

この場所が「一宮の玄関口」になってほしい。 _ 佐々木 真 (ローカルPM パートナー)

日本屈指のサーフスポットである一宮に根を下ろし、サーファー向けの物件を数多く手掛ける「波乗不動産」。賃貸・分譲を含め200 を超える物件実績を誇るこの会社を率いる佐々木真氏は、PARASOL においても重要な役割を果たした一人である。その彼が思い描くPARASOL の将来像とは、どのようなものであろうか。

サーファー目線での物件作りを志し、一宮で起業を決意。

サーフィンの魅力は、逆説的ですが「難しい」「上達しにくい」こと。他のスポーツは得意でもサーフィンは上手く行かないという人もたくさんいます。それでも、海に入れば日常から解放され無になることができます。波の状態で一日の行動を決める人も少なくないのは、そこに要因があると思います。20 代の頃、サーフィンに没頭し、バリ島へサーフトリップに行った際、現地の環境を見て、自分もサーファーフレンドリーな不動産を作りたいと考えて起業を決意しました。そこで、白羽の矢を立てたのが、ビジターとして通っていた一宮。波もいいし、地価も手頃だったので、自分で土地を購入し、サーファーのための賃貸物件を建てたのが最初でした。現在は随分と増えましたが、「サーファー向け物件」というのは、私が会社を始めた15 年ほど前はまだまだ珍しいものでした。

PARASOL を実現したチームビルディング。

PARASOL は、私にとっての集大成に近い案件だと思っています。賃貸・分譲・リノベーションと不動産に関わる業務を一通り手掛けてきたなかで、PARASOL が建つこの場所に、「サーファーのためのヴィレッジを作りたい」という構想を思い描くに至りました。もちろん、これだけの規模のプロジェクトは私たち「波乗不動産」だけでは到底実現できるはずがありません。プロジェクトに関係するすべての人がプロフェッショナルとして貢献するチームを作ること。この「チームビルディング」こそが、PARASOL を形にできた一番の要因ではないでしょうか。私自身、この場所で不動産事業に携わってきたことで、行政との調整、地元住民の方への配慮、将来的な顧客層が求めるニーズの把握といった部分で貢献できたと考えています。

一宮を知っていても知らなくても、みんなが集まる場所に。

今回一緒にいる岩切剣一郎さんと最初から考えていたのが、「クラブハウスの核となる場所を作ろう」ということでした。この部分はプロジェクトの最初から軸として考えていた部分でした。なぜかというところ、この場所を買った人でも借りた人でもビジターとして訪れた人でも、地元のコミュニティに緩やかに入っていく仕組みが必要だから。海外のサーフトاونに行くと、サーファーたちがコーヒーを飲みながら波の状態などを話しているカフェなどが必ずありますよね。そういう場所を作りたいかった。このクラブハウスに情報と人が集まり、コミュニティの核になればいいですよね。一宮のことをよく知っている人も、一宮のことは全く知らないという人も、このクラブハウスに来てもらえば、それぞれに適した情報を持って帰っていただけるような、いわば「玄関口」になってくれることを願っています。ワーケーションという言葉をはじめ、新しい働き方、新しい生き方を受容する空気が急速に広まってきた感がありますが、こうしたライフスタイルは世界中のサーフトاونでは昔から当たり前のものでした。週末はもちろん、気が向いたときに訪れてサーフィンなどを楽しみ、仕事もする。そうした生活は、すでに現実のものになっています。PARASOL を通じてこうした生き方と一宮という場所の魅力に触れ、一宮に住居やセカンドハウスを借りたり、一宮に移住する人が増えたらいいですね。



株式会社波乗不動産
代表取締役

佐々木 真
Shin SASAKI

1979 年生まれ。2003 年に一宮町に移住。2007 年、株式会社バンブリックを設立し、サーファー向け不動産物件の取り扱いをスタートさせる。2013 年にウェブサイト「波乗不動産」をオープン。ビーチサイドの不動産情報や、サーファー向け賃貸物件のデザイン建築・運営を手がける。2019 年には「THE SURF HAUS DESIGN 一級建築士事務所」を開設し、オンリーワンデザインのサーフハウスを建築している。

PARASOL の魅力は「人」にあり。 _ 04 池川 大樹

ここは「つながり」が「つながり」を呼ぶ街。

人を結ぶハブになりたい。 _ 池川 大樹 (CLUBHOUSE マネージャー / コンシェルジュ))

PARASOL のCLUBHOUSE マネージャーで、一宮の魅力を熟知したコンシェルジュとして活動する池川大樹氏は、自身も10 年以上にわたってサーフィンに魅せられているひとりのサーファー。PARASOL の開業に合わせて移住を決めたという点でも、場所にとらわれない新しい時代の生き方を体現する存在でもある。そんな彼は、PARASOL の未来をどのように描いているのだろう。

一宮の町に惹かれ、移住まで決めた。

私はこれまでに、新規店舗の立ち上げ業務を中心に、約10 年間にわたって飲食業に携わってきました。私はハワイが大好きなのですが、とあるレストランの日本上陸一号店のオープニングに参加したこともあります。今回、PARASOL の運営に参加することになった最大の理由は、「人生を教えてください一宮という町に関わることができる」という点でした。私自身、サーフィンを趣味としており、ここ10 年ほどビジターとして東京から一宮に通っていました。コンスタントに波がある一宮は、プロサーファーも多く通う、日本における「サーフィンの聖地」のひとつです。プロとアマチュアが同じフィールドで楽しむことができるという環境は、他のスポーツを含めても非常に稀有だと思います。その中で、この町が持つ魅力は以前から感じていました。「人も温かく、環境への意識も高いこの町で、いつか暮らしてみたい」という気持ちを持っていたので、私にとってはまさに夢のようなチャンスでした。PARASOL での業務を始めるにあたり、一宮への移住もすぐに決断しました。

町の魅力を発信する「一宮のコンシェルジュ」。

PARASOL は、一宮の中心とも呼べる場所にあります。その利点を活かし、一宮の街が持つ様々な側面を把握し、情報を整理して広く伝えていく「コンシェルジュ」のような存在になっていきたいと考えています。一宮には、魅力的なレストランやショップが数多く存在します。私自身が直接、足を運び、その魅力を知ること、これまで知らなかった一宮の魅力を発信するハブになることが理想です。PARASOL 自体は、レストランでもあり、ショップでもありますが、私たちだけが商業的に成功することは目指していません。PARASOL があることで、一宮の価値が高まること。それが、私たちの存在価値になるのだと思います。そのために、地元の方々とのリレーション構築が欠かせません。私たちの考え方を真摯にお伝えすることで、ご協力いただける方たちも増えてきています。ともに手を取り合って、一宮の魅力を知ってもらう活動ができればいいですね。サーフィンを楽しむだけでなく、サーフィンを含めた一宮での滞在体験をより良いものにするために、この場所ですしか味わえないアクティビティも用意していく予定です。

人のつながりが、次のつながりを呼ぶ町。

一番大切なこと。それは、PARASOL を訪れた人に、この街の魅力を深く感じてもらうことです。都心部に住みながら、週末や休暇を利用して一宮に遊びに来るという方も多くいらっしゃいます。そうした方がPARASOL を訪れ、街の魅力を発見し、人の温かさに触れ、今まで知らなかった一宮の顔を知ってくれたら最高ですね。もしかしたら、この街に惚れ込んで、私のように移住まで決めてしまう方も現れるかもしれません。そうなれば、微力ながら、大好きな一宮に貢献できた実感できる気がします。一宮は移住者もとても多い場所。人のつながりが、さらなる人のつながりを呼ぶ街です。PARASOL での出会いが、未来に続いていくものになれば嬉しく思います。



PARASOL CLUBHOUSE
マネージャー / コンシェルジュ

池川 大樹
Daiki IKEGAWA

商業施設中心に飲食店の新規開業、運営業務に携わり、2016 年には『東急プラザ銀座』にハワイ島で人気のレストラン第一号店を上陸させ立ち上げる。学生時代のアルバイト先の先輩に連れてきてもらったことが、サーフィンをはじめたきっかけ。その時に訪れたのが一宮町で、海はもちろん街の人々との出会いで虜になり、10 年以上足繁く通っていたが、PARASOL の開業と共に2020 年8 月より移住生活を開始。仕事前や休みの日など、時間があれば波乗りをし、地元の方々やビジターサーファーの方々と積極的に触れ合い充実した生活を送っている。

SF の巨匠であるフィリップ・K・ディック (Philip Kindred Dick) の『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』を映像化したリドリー・スコット (Ridley Scott) 監督の『ブレードランナー』。ビジュアル・フューチャリストの肩書きで参加したシド・ミード (Sydney Jay Mead) の描いた「雨に濡れた夜の高速道路の情景」は作品の世界観を端的に伝えるものとして、映画制作の羅針盤となった。フィルム・ノワール特有の退廃的な映像で展開される物語は、今なおファンを惹きつけてやまない。ちなみに、「ブレードランナー」とは「非法医療器具(blade)」の「運び屋(runner)」を意味する。

Chapter 6

Lecture about "Smart Home"

次世代の家
- スマートホームとは何か？

はじめてでもよく分かる「スマートホームの基礎知識」。

多くの人に、もっと快適な生活を。 私たちはスマートホームの伝導者になる。

1982 年公開の映画『ブレードランナー²⁴』。主人公 リック・デッカーの生活行動は住居全体を制御するコンピュータによってすべてが最適化され、微塵のストレスを感じることもないように見えた。SF 映画の金字塔で描かれた世界の実現が手の届くところまで来ていると聞いた時、あなたの心は躍るか。それとも不安に襲われるだろうか。「未来の理想的な家」として描かれたのは、現代でいうところの「スマートホーム」と呼ばれるものに近いだろう。そこで、PARASOL にも導入予定の「スマートホーム」の技術的特性や利便性、そして現在の課題感や普及に向けた青写真などについて、株式会社アクセルラボ 取締役 / CTO の青木継孝氏にお話をうかがった。

IoT（Internet of Things；モノがインターネットに接続されて情報を交換することにより相互に制御する仕組み）の発展は目覚ましく、今や家電などはインターネットに接続しないで使用することの方が珍しくなりつつあります。IoT 普及の先に見える「スマートホーム」とはどのような概念ですか？

青木 「スマートホーム」というのは「IoT 技術を活用して、家の中にある家電や防犯設備、各種端末などを常時ネットワークに接続した住宅」のことで、これによりこれまでの生活をより便利にアップデートすることを目指したものです。私たちは「全ての住宅をスマート化する」ことをミッションとして掲げ、従来の生活をもう一段高みに押し上げようとしています。この概念自体はインターネットと高速通信網の発達を背景に生まれてきたものです。

「スマートホーム」はまだまだ新しい概念なので、広く一般住居に普及するのは時間を要すると思われますが、いかがでしょうか？

青木 おそらく、一言に「スマートホーム」と言っても、その進化・進歩は段階的になると考えています。例えば、現時点では「住居の外から住居の中をコントロールできる」というように時間と距離の制約がなくなった段階です。次にやってくるのが「住居が提案してくれる」という段階。過去の行動履歴を分析することにより、住人が求めていることを予測するわけで

す。この段階では判断の主体は住人側にあります。その次に来るのが「家の中すべてが完全に自動化される」という段階。住人のみならず、より多くの行動データの蓄積、いわゆるビッグデータを解析することで、住人の行動パターンに合わせて住居が自動で最適化されるというイメージですね。この段階になると、住人は特別に意識することなく、生活行動を行うことができるでしょう。現在は、将来的な自動化に向けてデータを蓄積するための普及にあたると捉えています。

完全に自動化された場合、「人が住居にコントロールされるのでは？」という懸念も生まれそうですね。

青木 もちろん、人間が快適だと感じる環境は行動履歴の分析からだけではわかりません。そこには感情や情緒といったファクターが存在するからです。そこまで含めて「住人にとっての快適な環境とは何か？」を考えられる「スマートホーム」の実現を目指すべきでしょう。

未来の住宅の新機軸として「スマートホーム」に注目している事業者は多いと思います。アクセルラボとしての独自の戦略などはあるのでしょうか？

青木 IoT は「テクノロジーの総合格闘技」といわれるほど、多岐にわたる知識と技術を総動員する必要がある領域です。個々の技術自体に

特に目新しいものはありませんが、その組み合わせや最終的な施工の工程において、各社の競争が激化している状況です。そのなかで私たちが取っているのが「SpaceCore プラットフォーム」を核とした戦略です。多くのスマートホームデバイス事業者は自社で開発したアプリケーションを顧客に提供します。そうすると、鍵はこのアプリ、電気はこのアプリ、エアコンはこのアプリといった具合に、住人にとって煩雑な作業を強いることになります。そこで私たちは、様々なスマートホーム事業者が提供するデバイスを一元管理できるプラットフォームを開発し、それを各事業者に提供しています。私たちの目的は「スマートホームの利用者を増やすこと」なので、自社のアプリにこだわる必要がないのです。

よくわかりました。PARASOL においても住居棟に「スマートホーム」が導入されます。どのような仕様を想定されているのでしょうか？

青木 PARASOL の場合、物件の特性上、週末のみや別荘としての利用も少なくないと考えられるため、不在時間の長い住居も多くなると想定されます。その点を考えると、特に塩害や湿度対策を含めた「空調管理」や「セキュリティ面」において、スマートホームが持つ強みを発揮できるでしょう。特徴的な環境での実装事例となれば、類似した環境になる住宅での導入促進に向けて、格好のモデルケースになると今から期待しています。



スマートプラットフォーム「SpaceCore」の仕組み。



SpaceCore（スペース・コア）は株式会社アクセルラボが提供するスマートライフ・プラットフォームサービスの名称です。

SpaceCore が実現する 「本当に使えるスマートホーム」。

高速大容量・高信頼低遅延・多数同時接続といった特徴で、インターネットの世界に革新をもたらすと言われる5G（第5世代移动通信システム）。この次世代通信システムの普及によって、スマートホームは当たり前の存在になると予想される。住居内の様々な機器がインターネットに接続されることで、デバイスを通じてコントロールできるようになる未来は、すぐそこまで来ている。ところが、個々の機器を個々のアプリケーションが対応しているとしたら、それは便利だろうか。便利というよりも煩雑な作業が増えるだけではないだろうか。テレビのリモコンでさえ見つからないことがあるのに、だ。そこで、スマートホームの核となる「プラットフォーム」が重要となってくる。アクセルラボが2019 年から提供する「SpaceCore」は、多彩なデバイスとの連携が可能なプラットフォームで、導入戸数は16,000 戸を突破している。4 つのメリットを軸に、「本当に使えるスマートホーム」を実現する。

MERIT 1	便利 給湯器からエアコン、カーテン、照明、床暖房にいたるまで、外出先からアプリを使ってコントロールできるのももちろん、スマートホームデバイスと家電や設備が自動連携して、毎日の暮らしを劇的に便利に。
MERIT 2	安心 外出先からアプリでスマートロックを操作。鍵のかけ忘れや急な来客に対応できるのももちろん、開閉の通知を受け取ることもできる。さらに、ウェブカメラで独り暮らしの親や自宅のペットの様子を確認できる見守り機能も充実。
MERIT 3	快適 家事代行サービスやクリーニング、収納サービスなど、家事育児や仕事で忙しい方をサポートする生活サービスと連携。雑誌の読み放題やレシビサイトなど、隙間時間にちよっと役立つサービスも用意。
MERIT 4	コミュニケーション 対面での対応や封書、FAX、電話での連絡などコストと手間のかかった顧客とのやりとり。チャットやお知らせ機能を使えば効率的にコミュニケーションができ、顧客との接点も維持できる。

PARASOL
THE SURFSIDE VILLAGE ICHINOMIYA



いつでも安心できるセキュリティ

別荘や二拠点生活に使うのであれば、不在の時間が長くなって不安がある。SpaceCore を使えば、ドアや窓の鍵のモニターだけでなく、見守りカメラを使って住居内をリアルタイムで確認することも可能。別荘利用や二拠点生活はもちろん、定住者にとっても、安心・安全を高めてくれる。



海辺ならではの悩みを空調管理で解消

海からの潮風は居室内に入りこみ、塩害と湿度をもたらすことがある。これまでは空調を効かせるために、定期的に部屋を訪れる必要があったが、SpaceCore があれば、遠隔地からでも居室の環境管理ができる。常に快適な状態に居室内が保たれるのは嬉しい。



不在であることを知られないために

別荘や二拠点生活では、「不在時間を知られる」とは大きなリスク。不在であることを知られると、空き巣など思いがけない犯罪に狙われかねない。SpaceCore によって定期的に空調や照明をコントロールすることで、住民が在宅しているような演出をすれば、大切な財産を守る助けとなるだろう。



価値を創造し、可能性を広げ、
不動産をアップデート。

インヴァランスは「ものづくり」と「価値づくり」を通じて、不動産の新たな可能性を創造する」という理念のもと、不動産開発を行ってきました。業界に先駆けて「不動産」と「テクノロジー」をかけ合わせ、これまでにない価値を生み出すことを目指しており、モダンで上質なデザインの次世代技術を取り入れた「スマートホーム」の開発も、そのひとつの典型例です。

次代を象徴するコンセプトモデルである
THE SURFSIDE VILLAGE。

インヴァランスでは、未来に実現したいコトとして、4つのビジョンを掲げています。

- 「革新的なものづくりで、お客さまの歓びを創造する」
- 「価値づくりを通じて、豊かな暮らしを創造する」
- 「まちづくりを通じて、社会の活力を創造する」
- 「絆づくりを通じて、確かな信頼を創造する」

「THE SURFSIDE VILLAGE」プロジェクトは、この4つのビジョンを具現化したプロトタイプになります。このプロジェクトを通じ、都心だけでなく地方にも積極的に人が集まる仕組みをつくることで、社会課題の解決にも寄与したいと考えています。第一弾の舞台は、マリンスポーツをはじめとした様々なアクティビティを楽しめる千葉県一宮市に誕生する「PARASOL - THE SURFSIDE VILLAGE ICHINOMIYA -」。住みながら働く、別荘として楽しむ、二拠点生活で利用するなど、その用途は多彩です。

地域共生を見据えた、
都心と地方をつなぐ新たな生活拠点づくり。

社会環境の変化やコロナ禍によって、働く場所や住む場所の価値観の多様化が加速し、不動産にもさらなる付加価値が求められています。その意味で、「THE SURFSIDE VILLAGE」プロジェクトの開発・運営から得られる経験は、次世代の物件開発の大きな糧となります。インヴァランスは、自治体・地域とも連携をしながら、「仕事も趣味も楽しむ、生活を豊かにする新しい方法」をこれからも提案していきます。



Company Profile 会社概要

社名

株式会社インヴァランス

英文社名

INVALANCE Ltd.

設立

平成16年5月

代表取締役

小暮 学

資本金

1億4300万

主要株主

大東建託株式会社（100%）

本社

〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-1-1

新宿マインズタワー 17階

TEL：03-5302-7177

大阪支社

〒542-0081 大阪府大阪市中央区南船場1-13-14

南船場スクエアビル 3階

TEL：06-6261-3301

URL

https://www.invalance.jp/

事業内容

アセットマネジメント & コンサルティング

ディベロップメント事業

不動産売買・仲介事業

賃貸管理業

建物管理業

建築設計業

不動産流動化事業

建築工事および内装仕上工事業

損害保険代理業

免許番号

宅地建物取引業 国土交通大臣（1）第9837号

一級建築士事務所 東京都知事登録 第59096号

マンション管理業 国土交通大臣（3）第033674号

賃貸住宅管理業 国土交通大臣（2）第3393号

プライバシーマーク取得

21004528



01

膝ベスト

別名「黒死病」。内出血により感染者の皮膚が暗紫色になることに由来する。過去に3度、世界的流行が記録されている。ジョヴァンニ・ボッカッチョ（Giovanni Boccaccio）の『デカメロン』は、中世欧州でのベスト流行を題材としている。



02

コンキスタドール（征服者）

大航海時代に南北アメリカを探索・征服した者たち。アステカ文明を滅亡させたエルナン・コルテス（Hernán Cortés de Monroy y Pizarro）や、インカ帝国を侵略したフランシスコ・ピサロ（Francisco Pizarro）が代表的存在。



03

漫画版「風の谷のナウシカ」

1982年から1994年まで雑誌『アニメージュ』にて連載された宮崎駿による漫画作品。宮崎は、主人公・ナウシカのモデルとして、日本の古典『堤中納言物語』に登場する「蟲愛づる姫君」を挙げている。



04

AI

（Artificial Intelligence：人工知能）

人工知能の概念は、英国数学者 アラン・チューリング（Alan Mathison Turing）に端を発する。機械が知的か否かを判断する基準として、「チューリングテスト」は長く用いられてきた。



05

スペイン風邪

1918年から1920年にかけて流行したインフルエンザパンデミックの呼称。WHOの推計によると、当時の推計世界人口の18-20億人のうち、感染率は25-30%に達し、罹患者・死亡者の増加が第一次大戦の集結を早めたとされる。



06

アリストテレス

（Aristoteles）

ソクラテス、プラトンの系譜に連なる古代ギリシャの哲学者。人間の本質を「知（ソフィア）を愛する（フィロ）こと」にあるとし、これが哲学の語源となった。写真はレンブラント（Rembrandt Harmenszoon van Rijn）による肖像画。



07

「ハレ（晴れ）」と「ケ（穢）」

民俗学の父・柳田國男が唱えた概念。「ハレ」が非日常的側面、「ケ」が日常的側面を表し、「ハレ」は「ケ」を基本に成り立つ。「ケ」が維持できなくなると、別のリズムを持った「ハレ」が必要となり、多くは公的儀式として表現される。



08

ジャン＝ジャック・ルソー

（Jean-Jacques Rousseau）

『社会契約論』で知られるが、政治哲学や社会論、文学や音楽、科学、植物学におよぶまで、その興味の範囲は驚くほど広い。当時の常識を本質的に問いただすルソーの姿勢が、彼が「逆説的思想家」と呼ばれる所以である。



09

アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ

（Antoine Marie Jean-Baptiste Roger, comte de Saint-Exupéry）

飛行家にして作家。郵便輸送機のパイロットとして欧州・南米飛行路の開拓にも従事。第二次大戦中、自由フランス空軍に志願し北アフリカ戦線に参加。1944年、偵察飛行中に消息を断つ。『星の王子さま』（仏語版・英語版）出版の翌年だった。



10

VR / AR

（Virtual Reality：仮想現実 / Augmented Reality：拡張現実）

ヘッドマウントディスプレイを通じて、全く新しい体験を提供してくれるVRやAR。VRが仮想世界を現実体験するのにに対し、ARは現実に対して情報を付加する点で異なっている。



11

SDGs

（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）

2015年9月25日の国連総会において採択された、持続可能な開発のために必要不可欠な向こう15年間の新たな行動計画。17のグローバル目標と169の達成目標（ターゲット）からなり、232の指標を含む。



12

フィリップ・K・ディック

（Philip Kindred Dick）

米・シカゴに生まれた彼は、1962年に発表した『高い城の男』で、ヒューゴ賞（前年に出版された空想科学小説やファンタジー小説に関与した人物に与えられる賞）を受賞し、世に出た。1982年の死後も彼の作品の多くが映像化された。



13

ロバート・A・ハインライン

（Robert Anson Heinlein）

SF界の長老。タイトルも美しい『夏への扉』は、「冷凍睡眠」と「タイムマシン」を駆使して時間を行き来するタイムトラベルものの先駆けとして知られる。物語は「護民官ベトロニウス（通称 ビート）」という猫が鍵を握る。



14

アーサー・C・クラーク

（Arthur Charles Clarke）

『幼年期の終り』『2001年宇宙の旅』『太陽系最後の日』などの代表作で知られるSF作家。キングス・カレッジ・ロンドンにて物理学と数学を専攻。「十分に発達した科学は魔法と見分けがつかない」という言葉はよく知られている。



15

ジョージ・オーウェル

（George Orwell）

「テレスクリーン」によって市民生活が統制された社会を描いた『1984』は、ジュラ島での結核療養の中で脱稿した。極度に監視されたディストピア（反理想郷）を舞台としたSF作品を「オーウェリアン（Orwellian）」と呼ぶのは彼の名から。



16

ウィンストン・チャーチル

（Winston Leonard Spencer Churchill）

名門貴族マールバラ公爵家に生まれ、陸軍、新聞特派員を経て政治の世界へ。大臣の職を歴任するも、対インド政策で党内で孤立。第二次大戦勃発に伴い、政界での力を回復。1940年、首相就任。大戦中は戦戦局面で強大な指導力を発揮した。

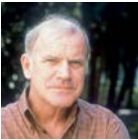


17

レオナルド・ダ・ヴィンチ

（Leonardo da Vinci）

盛期ルネサンス期イタリアの博学者。彼が関心を持っていた分野は発明、絵画、彫刻、建築、科学、音楽、数学、工学、文学、解剖学、地質学、天文学、植物学、筆記学、歴史学、地図学など多岐に渡り、「万能人」と称される。



18

キャリー・マリス

（Kary Banks Mullis）

ノーベル賞を獲得したサーファー。現在の分子生物学の発展に寄与したPCR法はあまりに新新であり、「Nature」や「Science」といった有力科学誌には採用されず、所属企業でも配置転換を強いられた。



19

ポリメラーゼ連鎖反応法

（Polymerase Chain Reaction）

DNA サンプルの特定領域を数百万から数十億倍へと増幅させる技術。一連の温度変化により目的のDNA領域を複製する。年代を経たDNAの解析、病原体の同定、犯罪捜査でのDNA照合など、幅広い領域で基本となっている技術。



20

ヴェニスビーチ（米）

1905年、大富豪 アボット・キニー（Abbot Kinney）は「アドリア海の女王」と呼ばれるイタリアの都市を模したリゾート開発に着手。1911年、正式にヴェニスと名付けられた。独特のビーチカルチャーが多くの人を惹きつける。



21

バイロンベイ（豪）

大陸最東端に位置し、切り立った断崖とその背後に広がる緑の対比が美しいオーストラリア随一のサーフスポット。世界遺産に登録されているナイトキャップ国立公園は、熱帯雨林の生物に出会えるナイトウォークが人気。



22

スピードクライミング

フリークライミング競技の一種目。予め設定されたコースをいかに早く駆け登るかを競う。ボルダリングやリードクライミングが「難易度」を争うのに対し、スピードクライミングは唯一「登攀タイム」を争うものとなっている。



23

WSL-QS6000

（World Surf League - Qualifying Series 6000）

プロサーフィン世界ツアーにおける予選シリーズ。一宮（千葉）、浜松（静岡県）、鵜沼（神奈川県）、小倉ヶ浜（宮崎）など、日本国内のサーフスポットが会場となってきた。6000という数字はグレードを表し、シーズンによって変更が加わる。



24

ブレードランナー

原作は、フィリップ・K・ディックの『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』。劇場公開は1982年だが、監督の意向に沿って再編集されたディレクターズ・カット（1992年）、さらに修正を加えたファイナル・カット版（2007年）が存在。

Introduction

「変化の時代」に顕在化する新しい生き方の萌芽

F.ザカリヤ 著、上原裕美子 訳『パンデミック後の世界 10の教訓』日経BP, 2021

小野昌弘・宮台真司・斎藤環・松尾匡・中島岳志・宇野重規・鈴木見仁・神里達博・小泉義之・柴田悠・中島隆博・大澤真幸 著、筑摩書房編集部 編『コロナ後の世界 いま、この地点から考える』筑摩書房, 2020

J.アタリ 著、林昌宏・坪子理美 訳『命の経済 パンデミック後、新しい世界が始まる』プレジデント社, 2020

C.シュワブ・T.マルレ 著、ナショナル・ジオグラフィック 編、藤田正美・チャールズ清水・安納令奈 訳『グレート・リセット ダボス会議で語られるアフターコロナの世界』日経ナショナルジオグラフィック社, 2020

Y.N.ハハリ 著、柴田裕之 訳『緊急提言パンデミック 奇禍とインタビュー』河出書房新社, 2020

P.ゾルダーン 著『コロナ時代の僕ら』早川書房, 2020

宮崎駿 著『風の谷のナウシカ』徳間書店, 1983

赤坂憲雄 著『ナウシカ考 風の谷の黙示録』岩波書店, 2019

スタジオジブリ・文春文庫 編『ジブリの教科書1 風の谷のナウシカ』文藝春秋, 2013

福岡伸一 著『新版 動的平衡 生物はなぜそこに宿るのか』小学館, 2017

池田善昭・福岡伸一 著『福岡伸一、西田哲学を読む 生命をめぐる思索の旅 動的平衡と絶対矛盾的自己同一』明石書店, 2017

G.ボッカッチョ 著、平川祐弘 訳『デカメロン（上・中・下）』河出書房新社, 2017

A.ホッジズ 著、土屋俊・土屋希和子 訳『エニグマ アラン・チューリング伝』勁草書房, 2015

アリステレス 著、牛田徳子 訳『政治学』京都大学学術出版界, 2001

A.M.ルロウ 著、森夏樹 訳『アリステレス 生物学の創造（上・下）』みすず書房, 2019

Chapter 1

「変化の時代」に顕在化する新しい生き方の萌芽

Y.N.ハハリ 著、柴田裕之 訳『21 Lessons 21世紀の人類のための21の思考』河出書房新社, 2019

K.ケリー 著、服部桂 訳『〈インターネット〉の次に来るもの 未来を決める12の法則』NHK出版, 2016

落合陽一 著『2030年の世界地図帳 あたらしい経済とSDGs、未来への展望』SBクリエイティブ, 2019

L.ダートネル 著、東郷えりか 訳『この世界が消えたあとの科学文明のつくりかた』河出書房新社, 2015

丸山俊一・NHK『欲望の時代の哲学』制作班『マルクス・ガブリエル 危機の時代を語る』NHK出版, 2020

山口周 著『武器になる哲学 人生を生き抜くための哲学・思想のキーコンセプト50』KADOKAWA, 2018

A.タン 著、プレジデント書籍編集チーム 編『オードリー・タン デジタルとAIの未来を語る』プレジデント社, 2020

柳田國男 著『日本の民俗学』中央公論新社, 2019

A.サン＝テグジュペリ 著、堀口大學 訳『人間の土地』新潮社, 1955

A.サン＝テグジュペリ 著、堀口大學 訳『夜間飛行』新潮社, 1956

J.ダイヤモンド 著、小川敏子・川上純子 訳『危機と人類（上・下）』日本経済新聞出版, 2019

J.ダイヤモンド・J.A.ロビンソン 編著、小坂恵理 訳『歴史は実験できるのか 自然実験が解き明かす人類史』慶應義塾大学出版界, 2018

P.K.ディック 著、浅倉久志 訳、土井宏明 イラスト / カバーデザイン『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』早川書房, 1977

R.A.ハインライン 著、小尾美佐 訳『夏への扉』早川書房, 2009

A.C.クラーク 著、福島正実 訳『幼年期の終り』早川書房, 1979

G.オーウェル 著、高橋和久 訳『一九八四年〔新訳版〕』早川書房, 2009

W.チャーチル 著、中村祐吉 訳『わが半生』中央公論新社, 2014

富田浩司 著『危機の指導者チャーチル』新潮社, 2011

C.アボット 著、清川幸美 訳『世界を動かした21の演説 あなたにとって「正しいこと」とは何か』英知出版, 2011

Chapter 2

仕事と趣味の現代的関係

N.ヒンディ 著、長谷川雅彬 監修、小巻靖子 訳『世界のビジネスリーダーがいまアートから学んでいること』クロスメディア・パブリッシング, 2018

山口周 著『武器になる哲学 人生を生き抜くための哲学・思想のキーコンセプト50』KADOKAWA, 2018

W.アイザックソン 著、土方奈美 訳『レオナルド・ダ・ヴィンチ（上・下）』文藝春秋, 2019

原本万紀子 著『芸術と情報のあいだ：情報を描写するインフォグラフィックスの素描』勁草書房, 2018

K.マリス 著、福岡伸一 訳『マリス博士の奇想天外な人生』早川書房, 2004

福岡伸一 著『生物と無生物のあいだ』講談社, 2007

南川高志 著『ローマ五賢帝「輝ける世紀」の虚像と実像』講談社, 2014

E.ギボン 著、中倉玄喜 編・訳『ローマ帝国衰亡史』PHP研究所, 2020

国土交通省『平成21年度「二地域居住推進施策のための基礎的調査」―都市と地域の交流・参加のための政策的方向性― 報告書概要』 <https://www.mlit.go.jp/common/001030813.pdf>

GLOCAL MISSION Times『「地方圏での暮らし」の意識・行動に関する調査結果（内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部事務局）』2020年6月4日（2021年1月31日 最終閲覧） <https://www.glocaltimes.jp/8866>

Chapter 3

PARASOL からはじめる未来

養老孟司 著『養老孟司の幸福論 まち、ときどき森』中央公論新社, 2015

養老孟司・C.W.ニコル 著『「身体」を忘れた日本人 JAPANESE, AND THE LOSS OF PHYSICAL SENSES』山と溪谷社, 2015

Chapter 4

PARASOL のすべて

全国町村会『千葉県一宮町／一宮版サーフォノミクス』2019年10月28日（2021年1月31日 最終閲覧） <https://www.zck.or.jp/site/forum/19440.html>

事業構想『TOKYO2020 レガシーを生む新ビジネス 五輪のサーフィン会場・千葉県一宮町 サーフォノミクスで成果』2018年5月（2021年1月31日 最終閲覧） <https://www.projectdesign.jp/201805/tokyo-2020/004863.php>

大塚和徳 著『ゴルフ時空間ツアー』ゴルフダイジェスト社, 2020

Chapter 5

PARASOL を創る人々

ライトニング編集部『ライトニング増刊 カリフォルニアスタイル Vol.15』エイ出版社, 2020

Chapter 6

次世代の家 - スマートホームとは何か？

P.M.サモン 著、品川四郎・石川裕人 訳『メイキング・オブ・ブレードランナー ファイナル・カット』ヴィレッジブックス, 2017

H.ファンチャー・M.グリーン・P.M.サモン・渡辺信一郎・大野和基 著『ブレードランナー―証言録』集英社インターナショナル, 2019

町山智浩 著『〈映画の見方〉がわかる本 ブレードランナーの未来世紀』新潮社, 2017

PARASOL -THE SURFSIDE VILLAGE ICHINOMIYA-
FACT BOOK

2021 年 3 月 1 日 初版第 1 刷発行

発行人

小暮 学

発行所

株式会社インヴァランス

問い合わせ先

PARASOL -THE SURFSIDE VILLAGE ICHINOMIYA-

事務局（株式会社インヴァランス内）

TEL | 03-5302-7177

本資料に掲載されている記事・写真の無断転載・複製を禁じます。

本資料に掲載された内容は、特段の記載がない限り、2021 年 2 月末日時点のものです。

以降、変更になることもございますので、予めご了承ください。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上の例外を除き、禁じられています。

STAFF

企画

下山 謙 / 町屋 佳代子（Bambook）

制作・編集・ライティング・デザイン・レイアウト

川上 主税

リサーチ

旦尾 嘉玄（Zen Brothers）



P A R A S ❄ L

THE SURFSIDE VILLAGE ICHINOMIYA